
マイクロブ

みゅうじん。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
マイクローブ

【Nコード】
N8813R

【作者名】
みゆうじん。

【あらすじ】
同性の幼馴染を好いてしまった子の話し。イケメン×平凡のつもり。
BL、ボーイズラブです

ほら、単純だろ（前書き）

何度目かの連載ですよろしくね

評価、アドバイス、感想もお願いします

ほら、単純だろ

嫌われればいいんだよ、離れたけりゃ。

ほら、単純だろ？

*

「俺さあ、……まだ誰にも好きって言った事無いんだよねー」

幼馴染のその話しに、もう何回耳を傾けた事だろうか。

「知ってるよ。この前も言ってた。だから何だよ？ 俺には関係ないだろが」

「ははっ。確かになあ——」

俺の幼馴染は、所謂『ヤリチン』……と言うか、とにかく、女性
が大好きだった。……いや、女性の全部と言うわけでもなく、強い
と言うなら、体。

「女ってさあ、いいよな。柔らかくて、細くて、力入れたら壊れそ
うで……」

「知らねえよ」

「え？ 何、シウウお前。まだ1回もシた事無いの？」

「……」

容姿にも恵まれた俺の幼馴染は、その顔で何人もの女性と遊んで
いる。不健全な意味で。

「俺は紘一こういちと違って好きな人としかし無いんだよ」

「ふーん……」

俺のことは別に興味なさそうに、家の冷蔵庫のドアを勝手に開き、
麦茶を取り出した。俺の家なのに、まるで自分の家のように行き来
し、自分のモノのように何でも取り出してくる。

「おい、少しは遠慮しろよ。お前の家じゃねえんだぞ」

「いーじゃん、昔から来てるだろ？ 家族も同然……じゃねえの？」
家族、ね。

「お前と家族なんてご免だぞ、俺は」

「うわっ。ひつでえなー」

酷いなんて、カケラも思っていないくせに。本当にもう、俺をフリ回すのは止めて欲しい。

「ていうか、いい加減家に毎日来るのやめろよ。俺にだって予定があるんだぞ」

「予定？ …… って何？」

麦茶を入れたグラスの口へ持つていき、そのまま飲まずに質問をしてきた。

予定なんて無い。全く。

「デ…… デート…、とか」

「へー、デートなあ…… お前、男子校なのに女子とそんなに出会えねえだろ」

共学の俺と違ってさ。と、その一言でグラスに口をつけた。目線はそのまま俺を写しこんでいる。まるで『嘘だろ』と俺の真つ赤な嘘を見抜いているような目に、またしても苛立つ。

「この間、コンパに呼び出された時とか……に」

コンパに呼び出されたのは嘘ではなかった。本当に、この間の夜、コンビ二に行こうとしていた時に電話が来て、人数が減ったから来いと言われて行った。

ただ、……そこでは楽しく会話しただけで、別にどうと言う発展には至らなかった。

「今時合コンかよっ！」

苦笑している意味がわからない。今時それはないって？ お前にして見ればダサイか？ …… お前はその顔でいつも女の子が寄って来てくれるもんな……。

「つか、これで分かっただろ？ だからもう来んな。迷惑」

「酷えなー。幼馴染ジャン？」

「幼馴染でもここまでしねえって。つか触るな」

俺の頭に手の平を置いてガシガシと乱暴に撫でまくる腕を振り払った。

そうだ、本当に顔は見たくないんだ。これじゃお前と違う高校に入った意味がないじゃないか。本当本当に――。

「絃一、お前、ウザいってマジで」

そう一言放つと、絃一はため息をつき、ソファに座りながら、立っている僕を見つめた。

「なー、あのさー」

「……何？」

「何でそんなに機嫌悪いの？ 中学卒業前からそうだったよな……？ いきなり第一志望変えたり、しかも俺の高校よりすげえ遠い高校にしたりさ。何で？」

「何でって……」

そんな理由、言えるわけ無いじゃないか。

「お前の事、嫌いになつてきたからだろ」

お前の事、好きだなんて。

「飽き飽きしてたんだ。だからもう顔、見せるな」

大好きなんて。……ましてやその好きの意味が、友達としての感情じゃない、恋色を含んでいる物だなんて。

言えるわけ無いじゃないか。

「俺の何が不服なわけ？」

「ソンザイ」

「かつちーん。キレるぞマジで？」

「キレとけ、勝手に」

俺だって、お前が好きだなんて信じたくは無いけれど。自分の思いはそう簡単に変えられないだろう？ だからお前を避けるんだ。嫌われたいんだ。

分かれよ。アホ。

「分っかんねー」

「……」

「嫌いならなしてそう言わねえの？ シュウのがウザいっての」それは多分。……未練、かもしれない。お前に聞かれるまで、言

わない。些細な、抵抗。

「ウザいならいいだろ。俺の事は放っておけ、会いにも来るな」

「……帰る」

無表情のままそう呟く紘一。俺の横をスッと通り抜け、自分の荷物をもって、帰っていく様子だった。

「おい、携帯忘れてんぞ」

「——わざと忘れたんだよ……」

本当にアホだ。こいつは。

「忘れモンしたら家、また来れるしょ」

「忘れても入れさせねえし。母さんから渡してもらっし」

「……」

俺の手から携帯を取り、今度こそ俺の家から出て行った。一気に訪れる静寂に、俺の体は崩れ落ちた。

これでいい。やっとこれで、諦めも付くだろう。コレでいいんだよ。

なあコウ。

お前もそう思うだろ？ 幼馴染の俺に、しかもこんな男に、恋愛感情を持たれるのは、今の俺以上にウザいだろ……？

「……もう、顔も見たくねえよ」

だから俺は、嘘を吐く。

好きな人としかない R15（前書き）

性的な描写が微妙にあります。

苦手な方は見ない事をオススメします。

好きな人としかない R15

俺には誰にも言えない秘密があった。

親にも友達にも、勿論絃一にも言えないような、深い深い秘密。当然誰にも話す気は無いし、話せない。

でもそれが今の俺にとって唯一のストレス発散であり、感情を少しでも薄れさせてくれるモノ。

誰にも言えない。

「ん……っ、ん」

暗闇の中に、俺以外の人の吐息と匂いを感じていた。汗が肌を伝い、シャツに滲む。この行為に及ぶ回数は、決して多い方では無いと思う。回数が回数なのか、やっぱりと言うべきなのか。慣れない感覚に自然と腰が浮く。

部屋のカーテンはピツシリと閉まっていて、部屋の電気もついてない。文字通りの真っ暗な部屋は、俺がリクエストした通りの風景だった。

「声抑えなくていいんだってば……はぁ……ちゃんと声、聞かせてよ」いつもそう言われてはみるが、やっぱり恥ずかしいし、いつもは出さない声。ましてや本当は俺が出させる側の人間。自分の腕を噛み、必死に出しそうになる声を抑えていた。俺の噛んでいるその腕を取り、歯型のくつきりついたその部分を妖しく舐める。

「うぁ、…ぁ、ぁ」

俺には秘密があった。

「跡、付けんなっつただろ」

事後。等身大鏡で自分の身体を映し見る俺がソイツに対してそういった。

「蚊にでも刺されたんじゃないか？」

意味の無いごまかしにため息が漏れる。

「んなワケあるか。……ったく。何が嬉しくて男からキスマーク付

けられなきゃいけねんだよ」

「あ、暴言」

「今度やったらテメエの顔に同じもん付けてやるぞ」

「いいよ。何個でもどうぞ」

コイツのこういう何でもプラス思考に考える性格が、正直羨ましかった。

「

……」

いまむらひこし
今村仁志。

俺は2週間くらい前からこの人とじょじょに性行為をするようになっていった。最初は手で相手の欲を満たすくらい。それが2週間たつて、今じゃこんな状態だ。

愛称は仁^{ジン}。俺の学校の先輩で、初めて会ったのはこの前のコンパちようど、紘一を突き放した4日後くらいの事だ。あっちからこっちに絡んできて、口説かれ。そのままこんな関係になった。

『好きな人としかない』

あながちそれは嘘ではなかったけれど、紘一とあんな状態になった数日後に口説かれた。しかも男。俺が好きなのも男で。むしろくしゃして、仁の話しに乗ってしまった。……そういう事だ。

「なに……ピアス開けたの？」

ふと、仁の耳に光る物を見つけた。シンプルな銀の粒。右耳の耳たぶに1個だけあった。昨日まではなくて、行為中にも気付かなかった。結構存在の薄いピアス。

「開けた開けた、似合う？」

「微妙」

「ひっでえ」

俺の感想にそうケラケラと笑う仁が、手のひらに乗っかるような小さなオレンジの箱を引き出しから取り出した。

「もう1個あるけど、……秀介も付ける？」

「いい。開けた後手入れ大変だろ、膿んだヤツ見た事あるからヤダ」
「残念だな。これ付けてくれたらお揃いだっただのにね、俺とお前」

「そういうのは本命に言つてやれよ」

俺と仁の関係は、体だけ。体だけ……と言つのも怪しいのか？
心まで繋がるうとはさすがに思えないし、まあ体だけ繋がったのも、
案外勇気が必要だった。その勇気で分厚い壁を乗り越えた先にあつ
たのは、痺れるような痛みと快感。俺にはもうそれだけで充分だつ
た。

「後でカノジヨ来るんだっけ？ 俺もう帰る」

「彼女？ …… じゃないけど」

「は？ アンタ俺に言つたじゃねえか」

「彼女兼……セフレ女バージョン？」

「完全に彼女だろ、それ」

「恋人なんだけど、恋人じゃない……みたいなの？」

それは一体、どういう意味なのだろうか。恋人なのに恋人じゃない。
別に好きでもない？ …… それなら彼女とは言えないし。彼女
と言うなら心も繋がっていて、ましてやセックスもしているんだか
ら、体も繋がっていて。

どこが恋人じゃないのだろうか。

「まあ、いいや。帰る」

「この時間帰りたくないんじゃないの？ まだ居ろよ」

「いいって。多分、もう今日は来てねえだろうし」

「ああ、例の男？」

「うん」

頷き、ネクタイを緩く締めてから、スクールバッグを肩に提げた。
絨一にもう来るなと言つてから2週間。俺の言葉とは関係無しに、
いつもと変わらずほぼ毎日来ている。来るなと言つた次の日にも来
たらしいし。……まあ、その時には多分、俺はこの家で仁とこんな
行為してたんだろうがな。

今日はいつも事情を説明する俺の親も居ないし、大人しく帰つて
いるだろう。それでもう日にちもこんなに経過している。もうすぐ
来なくなるだろう。

「アンタん家からいちいち帰るのメンドクサイから、今度俺ん家来てよ」

「え、いーの？　じゃ今から行くわ」

「それは止める。あー：明日明後日なら大丈夫かも。んじゃ、俺も帰る。明日教室でも来てよ」

「んー、分かった。じゃあなー」

仁の家を出て、だらしなく歩みを進めた。

帰ったら風呂に入ってすぐ寝よう。

2週間の間に結構こういう行為をして、さすがにもう嫌悪感はいり抱かなくなったものの、あの甘い快樂にはまだ慣れない。

「……」

俺には、誰にも言えない秘密がある。

友達なんかじゃねえよ

「気持ち悪」

その日。

俺はとんでもない吐き気に襲われながら目を覚ました。セツトしたはずの携帯のアラームは、携帯自体が何故かマナーモードになっていて気付かなかった。

学校の心配より先に、迷わずトイレに直行し、からっぽの胃の中で、胃液だけを吐く。

シーンとした家の中。父さんは出張。母さんは友達と旅行で明後日まで帰ってこない。いつもならこんな状況を見た瞬間に飛んで来る母さんが居なくて、少しばかりの安堵を覚えた。ただでさえ高い声が更に高くなり、耳に響くのは本当に最悪。

吐き気がさつきよりも収まり、居間に戻ると、とりあえず引き出しの中から体温計を取り出し、脇に差し込みソファに体を預けた。熱があるうがなかるうが、この時間に起きて準備した頃には、学校の始業ベルは鳴っている。

今日はもう休みたい。

否、休む。

「皆勤無くなつたし……」

今年入学して1度も休んでなかった学校を、今日初めて休む。そういうえば、俺は学校の連絡先を知らなかった。あの子離れできない親なら携帯に学校番号の一つ二つ登録くらいしていると思うけど、……理由を言ったらやっぱり飛んで帰ってきそうで嫌だ。

しょうがない。と、まだマナーモードになつてる携帯の画面をじっとみつめ、電話帳を開いた。同じクラスの奴にメールを作成し、休むと伝えてくれとそう送信した。

送信ボタンを押すと同時に画面から視点を外す。

何故だろうか。非常にだるい。割と涼しい今年の夏なのに。具合

悪くなる意味がよく分からない。まあ別に、そんな事はどうだっていいけれど。

脇の間からピピピと音が聞こえた。体温計を引き抜き数字を覗き込む。

「なんだ…微熱じゃん」

こんな少しばかり高くなった体温でよく具合悪くなれるもんだ。

……ようは気が抜けてるって事だろう。

気が抜けてるからと言って、気を引き締めるようなイベントは何も無く。今日は1日寝ようと、送信完了と書かれた携帯の画面を閉じて自室へと戻った。

目を閉じてもすぐには寝れず。それでもシーンとした静寂の中の安堵はじょじょに俺を眠りへと導いてくれた。

眠りに入って3、4時間後くらいに目を覚ます。今度は空腹が睡眠を妨げた。居間に行き冷蔵庫を開けるも、ちゃんと調理された料理は何一つなかった。

棚の端に置いてある網カゴの中にはカップ麺もあったけれど、肝心のお湯を沸かすのが面倒臭いと思えた。この家にはポットと言われる物が無いのだ。

やかんに水を入れて火にかけるだけの簡単な行為がやけにウザうたく感じて、俺はソファに寝転んだ。

——別に食わなくても死にやしねえ。

俺は別に1人暮らしなわけでもないし、時間がたてば親が帰ってくる。このまま黙って静かにしてればいつもの活力も取り戻せるだろうし。

なんて思いで、ソファから片足を下ろした。

カーテンは窓をふさいでて、しかも黒色だから完全ではないけれど漏れる光は微量。電気も付いてない暗い部屋。たまに通る自動車と軽い雑音だけ聞こえる部屋。

ここは天国か。

今にも吐きそうな気分で少しだけ笑みをこぼした。

*

時刻は優に6時を回っていた。

「ん……」

寝たり起きたり。

別にTVを見たりするわけでもない。

横になつてればいいだけで、それは凄く楽だった。そんな天国な時間は、インターホンの連打によって解かれる。

「絃……か？」

来るなど言つてたのに無視して来ている無神経野郎。

「……」

少ししたら止むだろうと、何度も鳴り響くソレを無視し続けていた。……2、3分経つても一向に止む気配なんて物は微塵もなく。

ズキズキと脳に響く音に、イライラが募り、やっぱり気分も悪くなつてきた。

「うぜえ」

本気でウザく感じて来た時、ふと音が鳴り止んで、急にまた静寂が訪れた。

「帰った……？」

立ち上がり、玄関までフラフラゆたゆた歩いた。靴を踏み、小さな穴から外を覗く。

「うわっ……!？」

「いるじゃーん」

穴の中から見えたのは見慣れた外界ではなく、人間の目ん玉。黒い目がジッと俺を覗いて、俺は1歩2歩後ろへ引き下がってしまった。

「何ででないの？ あ、もしかして例の子だと思った？ 違う違う

俺だよ俺ー」

耳元で何回も聞きなれた声。

今村 仁志。

「……」

例の子。それは多分絃一の事を言っているんだろう。まあ、……正解だ。

鍵と、鍵が壊されても扉を開けられない為の固定バー2本と、おまけに嚴重にチェーンまでしてある扉をガチャガチャと開いた。

「なんでいんの？」

そう冷たく言っても、仁はそんなにへたる性格ではなかった。

「だって明日か明後日来てっていったんジャン。今日学校来なかったし？ 電話も出てくれないし」

「俺お前に携帯番号教えたっけ？」

「教えてもらったよ、さつき。秀介のオトモダチに」

「訴えるぞ」

「やめろー！」

ため息をつき、ダルい体を冷たい壁にくっつけた。さつき見れなかった外の空は夕日でオレンジに焦げている。カラスが群れを作って空を泳ぎ、涼しい風が吹きつける。

「気分悪くて休んだんでしょ。何、まだ具合悪いの？ 腰痛い？」

「アホか、もう慣れたっつの。んで、何で来たの？」

「ん？ だから昨日来いって言ったからだって。」

そう言って俺の頭をぽんぽん軽く撫でる仁を、もう面倒臭くて手を払いも出来なかった。それに、別に心配して来てくれたわけじゃなさそうだし。言葉に裏があった。

様はやりたいて、そういう事だろ。

ずっと寝転がって体が重たい。別に欲は全然溜まっではないけれど、やりたくないってわけでもなかった。

「いいよ、入んなよ」

OKの合図。

そう言って背を向けようとした俺の肩を掴んで、ぐいつと引き寄せる。

「ちょ、何してっ」

そのまま俺の顎をくいつと持ち上げ、俺の顔間近に仁の顔が降り

てきた。触れるだけのキスは、別にヤリ目的と言っ感じでもなく、
挨拶みたいな感覚に取れた。

「や、めろって……！ お前の家じゃな……」

引き寄せられて密接していた体を引き離し、またキスされないように横を向く。

『お前の家じゃないんだから、誰かに見られたらどうすんだ』

言おうとして全部言えなかったのは、横を見た目から写る外界に、
何か見覚えのある人影を見たから。

「？ 秀介？ どうし……」

いきなりフリーズした俺に不思議に思った仁が、俺と同じ方向を
向く。

「誰？ もしかして友達？」

「……」

そんな生温い人種だったらどれだけ良かった事が。

「友達なんかじゃねえよ」

逆光で見づらいそいつを、目を細めて見た。驚いた用に目を開き
ながら俺を睨むそいつに、何の感想も持たなかった。

ただ一つだけ。

——これで本当に終わりだ。

「行こう。早く家の中入って」

「ん、ん？ ああうん」

仁を玄関に入れ、玄関の扉を閉めるときに、俺はもう一度だけそ
いつを見た。そこから1歩も動かない。俺が同じ男とキスしてんの
がそんなに驚くことが。

まあ、そつだよな。男と男だもんな。女好きのお前には分からな
いよ。

……なあ、紘一。

閉まり切ったドアに鍵をし、バーを閉めた。

「ざまあみろ……」

「何かいった？」

小さく呟いた声は仁には聞こえていないようで、俺はいや。と首を振った。

「俺の部屋いこ」

ざまあみろとは、一体誰に言っただろうか。

*

その日の性行為。

俺は今までにないほど、一番泣いた。

「痛い……っ」

「え、マジ？ いつもとかわんねーんだけどなー」

「へたくそ」

涙を痛さのせいにして。

早く起きて

そんなにはやっていない筈なのに、何で意識を飛ばしてしまったんだ――。

脳が覚醒する瞬間にすら、そんなことが思い浮かんだ。

起きてからマズ最初に目に映したのが携帯の画面だった。目を閉じたままベッドを這うみたいに携帯を探り、いざ見つかった携帯をパカッと開いて重たい瞼を開けて見る。画面右下に設定した文字時計は、もうとづくに8時を回っている。暗かったはずの部屋には明るい電気がついていて、仰向けに寝返りをつつたとき、眩しさに目を細めた。

「あ、起きた」

耳元らへんで声が聞こえる。

声のする方を向くと、笑顔のジンがそこにはいた。…何か寝ずらと思っていたら、隣と一緒にベッドに入っているこの男に腕枕されていた。何か苦しいと思ってたんだ。多分うつ伏せ状態のまま腕枕をされていて、こいつの腕が俺の首に組み敷かれていた。仰向けになつてゐる今は、ゴツゴツした感触が頭に刺激を与えていて、起き上がった時に、違和感を覚える後頭部をワサワサと撫でた。

「なんでいんの？」

眩しい電気と、コイツがいるっていう、そんな存在が気に入らなくて、俺はもつと目を細めてそんな風に言った。

「ひっでえな」。体繋げた相手が気失っちゃって……お目覚め確認はしたいデシヨ？」

モノズキつてのは、多分コイツのことを言うんじゃないんだろうか……？俺がもしお前の立場なら、こんな1mも胸の膨らみを期待できないようなやつ放つといてさっさと帰る。

そもそも性行為なんてしないな。

「男のお目覚め見て何が楽しいんだか…恋人でもあるまいし、俺は

男だぞ」

だって俺は男だもん。

男が男を好きになっっている状況で言うのもなんだけど。男が好きでもない男と性行為している状況で言うのもアレだけど。

さつきも確かに見ただろ、紘一のリアクション。あれが模範解答だ。気持ち悪いそうに目を見開いてるその顔はもう、完全に俺の事を嫌っている。

これで俺の想いも無くなる。

だから、俺がもう紘一をどうも想えなくなったら、お前ともこの関係切るつもりだぞ。

「んじゃ恋人なっちゃう？」

「……」

ああ思えばこう言う。

まあ仁の性格は分かっただけはいたけれど、寝起きに次いでこんなシリアスな話しをしている時に炸裂されるとそれは、酷くウザかった。

「あんたのそういうところ、すげえ嫌い」

好きでもないやつと体を繋げて、次は好きでもないやつと恋愛をする？

俺が今まで紘一の事で散々悩んでいた時間が、無かった事にされているような気分だった。好きななんて感情が無い恋人候補はすぐ目の前に転がっているのに、昔から隣にいた、好きの感情ありまくりの人間は、俺には絶対に振り向かない。

じゃあ恋人になっちゃう？　なんて。そんな簡単に……。

冗談でも軽く口にするな馬鹿。

「俺、結構真面目だけど……？」

「アホか、帰れ」

そんな俺に、仁は少し笑いながらため息を吐き、俺の髪を軽くサラッと触ってからベッドから立ち上がり、ズボンにベルトをつけ始めた。

それを、ベッドの上から見ていた。夏だけれど、何故か少し寒気

を感じ、俺は真っ裸の体に毛布を覆った。

そういえば、すっかり忘れていたけれど、俺は軽い微熱を出していた。いくら微熱でも熱は熱。こんな真っ裸じゃ夏でも寒気を覚えるのは当たり前なのかもしれない。

「ねえ、俺の服とつて。全部」

どうも立つのはかったるくて、ちょうど立って身支度をしている仁をこき使った。

「一応先輩なんだけど、俺」

「俺がアンタの事『先輩』つけて呼んだ事ってあったっけ？」

「様は俺のこと先輩なんて思ってたねえって事？ めっちゃひでえー」
そう言いつつも、体をかがませて床に散乱している俺の服をベッドの上に放り投げている。

「ああ、そうだ。ねえ……今日ほんとに痛かった？」

「……？」

脈絡の無い質問に首を傾げてみる。

「セックス」

お前の頭っていつもそんなことばっか考えてんのな。

まあでも、……痛い痛い言ってたのは俺の方か……

「めちやくちや痛かった」

そんな風に言った俺に、仁はまた『いつもと変わねえぞ……？』

と、そんな事を小さく呟いていた。

「もしかしてさ……良すぎてヤバくて痛いふりしてたとか……」

ふと、仁が顔を上げてニヤニヤと笑ってそう言った。

「……別に。」

「えー」

そう質問を返して、俺は布団の上で着替えを始めた。
プラス思考すぎるだろ。

でも本当に、いつもと変わらなかった。痛みなんてそんなに変わらないし、よさもそんなに変わらない。

快感も痛みを同じ。ただ悲しくてとんでもなく泣きたくて、心臓

が苦しくて、何かの恐怖にかられた俺は、必死に仁に抱きついていった。ただそれだけの事だ。確かに勘違いされる行動だとは思っけど。「じゃ、さ。シヨックだった？ アイツに俺とのキス見られて……とか。コイツはどうしてそんなに人の心を探るのが好きなんだろうか。」

「残念、不正解」

いや、むしろ俺は喜んでるんだ。やっとこれで嫌われるって、やっと諦められるって。逆に嬉しいんだ。嬉しくて震えて、涙が止まらない。

そんな感じだと思いたい。

「そつか。ま、いいや！ んじゃ、俺帰るな」

身支度を終えたジンが、カバンを持って部屋のドアを開ける。

「お見送りなし？」

「サヨウナラ」

「ホント最後までひっでえの！」

「今更……」

本当今更なんだな。と最後に一言だけ言った仁は、部屋のドアをしめて、電気についていない暗闇の中に消えていった。耳を澄ませていると、階段を下りる音が聞こえ、更に少し時間が立つと、何重にもびっしり付けられた鍵やら何やら外される音がして、それからドアがボタンと閉まる音が聞こえた。

突然、さっきに戻ったシーンとした空気が浮かび上がってくる。

「さみいなあ……」

さき程まで暑苦しいほどあった他の人間の体温が、跡形もなく消え去って、寒さが上昇している。布団を深く被って、体を少しだけ丸めた。

「……」

あの後、あの現場を見た紘一は一体どうしたんだろうか。

家に帰って、……それから俺を思い出してキモイなんて思ってい

たり。実際もう俺のことはどうでもいいとか思ってたたり。

「それはちよつと——」

虚しかったりする。

性行為による疲労と紘一に関するストレスと、軽い熱と寒さ。今日1日一杯散々寝た筈なのに、眠気はまたしても襲ってきた。

俺にとつては嬉しい睡魔で。でも眠気があつても汗臭い事後の臭いをさせたまま眠るのはどうしても嫌で、最後の気力を振り絞って風呂に入ってから、俺はまたその睡魔の誘いに乗った。

それでも数時間後、今度は吐き気でも空腹でも無いモノがまた俺の眠りを妨げた。

それは俺の脳には思いつきもしない存在で、少し以上の驚きを覚える。

「よぉ……早く起きて」

「……こ、いち……」

悲しかったけれど、ざまあみる

どうしようもなく、頭が痛かった。なんとなく腹も痛くて、尻も痛い。尻はさっきの行為のせいで痛くて、腹は風邪菌のせいかもしれない。頭も風邪のせいだとは思うけれど、それだけの理由で痛いんじゃないってのは分かっていた。

目の前にいる絃一は笑みを一切見せず、ただ一言。俺に起きろとだけ言葉を発した。

いつもみたいに色々言いたいことはあつたけれど、口にしたらない事まで口にしてしまいそうで、俺は絃一の言うことを素直に聞いて、ベッドから起き上がった。

「……」

目の前に立っている男は、ずっと俺を睨んでいる。

とりあえずは重い頭を一生懸命に起こしたけれど、俺はもう、驚きすぎて驚くのにも疲れ、逆に冷静に絃一の顔を見上げた。

「鍵、開いてたから勝手に入った」

「不法侵入だぞ、帰れ」

「黙れ」

どうやら、相手はギャグをかます気は無いらしい。いつもぺちゃくちゃ動いている口が、全然動かない。

じゃあ何話すの？ とはネタでもギャグにしても聞けない。

だって大体分かってるから。

「さっき、キスしてたヤツと何してたの？」

ほら、正解。

「んなこと……いちいち聞かなくても分かんじゃん」

玄関の前でキスしていて、そいつを部屋に入れて、その後何してるも何も無いと思うんだが。

「さっさと答えろっ」

キレ気味の絃一に、さすがの俺もうんざりした。

何で。

……何故にここまで俺の中に入ってこようとするんだろうか、この男は。

キスを見られて、気持ち悪がられて、もう近づかなくなっただけで終わり。なんて事を考えてた後すぐにコレだ。鍵が開いてたからって勝手に入り込んで、半ギレで、分かりきった質問で俺を問い詰める。

「交尾」

ウゼエよ。

「子なんか生産されねえだろーが」

いや、全くその通りで。

「お前、ああいうのが好きなのか？」

「ああいうの？」

ああいうのが好きなのかと言うのは、一体どういう意味なのだろうか。俺はジンみたいな性格のヤツが好きなのかって？ ……なんだそれ、意味わかんね。嫉妬？

なーんて。

そんなわけ、1%も無いって事は分かりきってただけだ。

誤解して期待するんだ、そういう曖昧な言葉は。期待して胸がドキンとなって、それで、結局期待した意味とは全く別の意味で、それで傷つくんだよ馬鹿。

「男とセックスするのが趣味なのか？」

ほら。少し傷ついた。胸がツキンって。

「どうなん？」

「うん、そうだよ」

傷ついたから肯定してみる。

この感覚が、一番嫌い。

「……」

胸がキュウッと締め付けられるような、そうそう、こんな感じ。お前を好きになって、もう何十回何百回も感じてる。

「男とすんのが趣味なんだよ。お前には分からないんだろうけどさ」

あ……結構良いモンだよ？」

嫌いなその感覚を振り払ってから、軽々しく、そうやって嫌われるように笑ってやった。いかにも疲れたって感じで両腕を上を広げて、背伸びをしてやった。悲しい。

悲しかったけれど、ざまあみる。そんな感じでまた薄く笑ってやったら、紘一にビンタされた。突然のことで、俺はそれを避けれるわけもなく、衝撃の流れで同時に顔が横を向く。かなりの痛みが俺の頬に突き刺さって、頬を手の平に乗せた。

「てめえ、気持ち悪いよ」

心の底からそう思ったんだろう。俺にはわかった。

瞬間、その言葉が、俺の胸にグサッと、そんな軽い効果音以上の激しさで、突き刺さった気がした。

気持ち悪いって思えばいい、なんてさっきからたくさん言っていたけれど、本人から言われるそれは、今までで一番きついモノだった。

そう思われたくても、本人から直に言われればきつい。そんな寂しさを初めて味わう。

痛くて痛くて、とんでもなく痛くて、寂しくて悲しくて、泣きたい。

「帰ってくんねえかな？　気持ち悪いんならもう会いたくないだろ。てか、もう会わなくていいしさ、……な？」

つらいのはもう嫌で。他の奴等になんて言われたって、もういいさ。今まで逃げずにここまでやってきたんだから、もう逃げたって

あ、いや、もうジンと性行為って時点で逃げてたかな？　……じ

ゃあ、逃げ切らせてくれ。こいつの目の前から、全ての状況から。

早く、もう終了させてくれ。今度こそ終わりだ。終わりの終わりに――。

「帰らねえ」

紘一の口から出た言葉に啞然とする。

そうだ。いつも、俺の絶望は全部、コイツからやってくるものだ

った。

「なんっ……で……」

つらいのはもう嫌だって。

「帰らない」

もういい加減、過去になってくれよ。コウ。

とか、そんな感じ

紘一の前で、泣いてなんかやんなかった。

「気持ち悪いのに、何で帰ってくんねえの？」

寝床を貸せと言ってきた紘一に、先ほど寝ていた俺のベッドを貸してやった。ベッドから抜け出したのを見て、少ししてから紘一がベッドに潜り込む。ベッドから出た俺は、クラクラする頭を今も必死に抑え、足に力を入れ、その場に立っている。

寝転がった紘一は、すぐに寝返りを打って壁側に顔を寄せた。毛布も何も被らないで、勝手に部屋に上がりこんだそのままの、Ｔシャツと、下は学校指定のロングジャージだろうか。裾を何回か折ったような感じの軽い格好をしている。

家でゴロゴロしていて、ふと思いつてコンビニにでも行きそうな、そんなラフな格好。俺の家はコンビニか……？

「気持ち悪いから、帰んねえの」

壁に向かったままで、そう、ポツリと呟く。

——意味わかんねえよ。

何が言いたいのかさっぱり分からない。何を思っているのかさっぱり分からない。

口数は多いけれど、コイツはトークは余り上手い方でもなかった。やっぱり、口数は少なくてもトークは下手なままで、俺には何をどう解釈していいのかも分からなかった。

それからはもうお互い無言状態で。とりあえず気まずい感じになりつつあったので、俺はそのまま部屋を出た。

階段を降り、居間に向かう途中に見た玄関のドアには、きつちりと、鍵もバーも閉めてあった。

俺が仁を見送って、鍵もちゃんと閉めていたら紘一は入ってこれなくて、こんな状況にもならなかったのにな……。

そう思いながら玄関を通り抜け、暗い中で電気を付け、そのまま

ソファに寝転んだ。頭がズキズキと痛み続ける。

「……」

今、アイツはどんな思いであそこにいるんだろうか？ 男とキスしている俺を見て、俺があつた男としていた事後のベッドで横になつて。気持ち悪いと、確かにそう口にしたんだ。俺の存在が、俺がそうしている事を。何もかも。

気持ち悪いならさっさとここから出ていけばいいのに。ていうか、そんな気持ち悪いモノを見せない為にわざわざ離れてやったのに。自分から寄つてきやがって。

女が好きなら女の所にいけばいい。わざわざ俺の目の前に現れて、女の話しをするな。その度俺を傷つけまくって。

むしろコレでお相子じゃないんだろうか。

これを機に、いままで合つた事は全て無かつた事にして、お互いゼロから赤の他人として――。

「やつていける……？」

俺は確かに絃一から離れようとしたけれど、全てを無かつた事にしようとしたことなんてなかった。そんな過去もあった。みたいに、一、思い出的な物になればいいなんて思っていた。

全て無かつた事にするなんて、本当に出来るのだろうか？ 絃一じゃなくて、俺が。

俺のそんな考えは、やっぱり甘い？ 切るならとことん切つた方がいい？ 今がちょうどそのチャンス時なのだろう。

今離れなきゃ、いつ離れる。

俺の甘い考えがこんな風になった。

結局傷ついたのは自分じゃねえか。

「甘えよ……」

*

甘いから、結局はこう考えてみる。

嫌われるならとことん嫌われよう。どん底まで嫌われたのなら、そいつの脳から俺の存在は一生消えないわけだから、どんなカタチ

であれそれを喜ぶ事。

嫌われればいいんだよ、離れたけりゃ。嫌われれば、あつちから黙って離れてくれるんだし。一番最初にもそんな事を考えていた筈なんだ。単純な話しなワケだから。

今まで俺を傷つけた最終復讐？

とか、そんな感じで。

嫌われに行こうか。

出来ない感じらしいよ R15（前書き）

性的な描写があります。

15歳以下と苦手な方は見ない事をオススメします。

出来ない感じらしいよ R15

男だからとか女だからとか、年上だからとか年下だからとか、家族だからとか障害者だからとか、二股だからとか不倫だからとか。そんな事を考え始めたのはいつ頃だっただろうか？ 希望を持った事なんか勿論1度もないけれど。絶望を覚えたのはそんな近い時間じゃない、もうとつくの昔だったかも。

人にどう思われようがどうでも良かった。ただ一人を除いて。

それが色褪せた恋愛感情なんて信じたくは無かった。そのただ一人が同じ男なんてもっと信じたく無かったけれど。

男だから男は好きになっちゃいけないだとか。

女だから女は好きになっちゃいけないだとか。

「キリスト教じゃ、同性愛は罪らしいよ。昨日聞いた」

俺はキリスト教に興味も無かったから、キリストを崇高している人にどう思われても良かったけれど、そんな事を俺に教えたそういつはどう思ったのか。

ただ、それだけ気になった。

——お前はどっと思っ？

そんな俺の事を。

怖くてそんな事、聞けなかったけど。

「……」

俺とアイツは同い年で、他人から交際を心配されるほど年が離れているわけでもないし、お互い障害者でもないから、別に何も支障はない。家族でもなければ、アイツは一定の人とは付き合っていないから二股にもならないし、結婚してないから不倫でもない。

ただ一つ。俺もアイツも男だから。それだけ。

だから恋愛は出来ない感じらしいよ。

でも好きだから。諦めきれないほどに膨大しちゃってるから。だからどうか俺を嫌ってくれればいい。俺を忘れられなくなるくらい。

嫌え。

「っ…………」

深夜。

暗闇の中で、必死に体を揺らした。寒いのは、多分さつきと同じ理由なんだろうから、気にしないで置く。

「ぐっ…………ア」

下半身やら腹の中やらが痛む中、闇に慣れた目で下を見てみる。俺の学校のネクタイと、他にちょうど長いものが無かったので、父さんの仕事用の引き出し入っていたビニールテープを使った。

こんなにされてもまだ起きる気配すらない紘一に、もう死んでいるんじゃないかと少し不安さえ抱いたけれど、温かい生きてるという温度が、ひたすら伝わってくる。

温かいと言うよりは、熱いと言った方がいいのか。だから紘一の上でひたすら揺れてみる。

どうせなら、ちゃんと仁にやり方教わっとけば良かった。なんて、そんな事を薄っすらと思って、苦笑した。

いつもの快樂が全くない。あるのはいつもとは倍以上の痛みで、あと少しだけ鉄の臭いがしたときに、血が出ているという事も知る。まあ、でも、下でまだ眠っている相手はそんな痛み全くなさそうで、安心した。気持ち良くなってももらわないと困るから。じゃないと嫌いになってももらえないから。

だから、別に俺が快樂を得なくてもいいのだ。

「こ、…………いち。…起きろよ、つなあ」

これ以上寝たままの状態で、それでもし事を終わらせられたら元も子もない。だから自分の意思で眠る相手に声をかけてみた。

「…………」

寝起きが悪い。なんてのは知っていたけれど、まさかここまでとは予想外。昔何度かTVや漫画みたいにフライパンとオタマを持ち出して、カンカン鳴らした事はあったけれど。

「っきてくれ、なきや、困るよ、…………っ」

「ん……ん？」

何度目かの呼びかけと、下半身からの快樂。ようやく目を覚ました様子で、安心した。安心して体の力が抜けて痛みが急にきつくなったので、腰の揺れを強くしてみた。痛みで体が強張る。

「なっ。……なに、してんだよ……？」

状況が飲み込めないらしいソイツは、実に滑稽こっけいで。

「何、してると思う……？」

ネクタイで視界を遮られていて、ビニールテープで手をガチガチに固定させてある。俺が今している行為は強制的な性行為。俗に言う夜這いなるもの。これはもう立派な犯罪だ。

相手が同性な分、キリスト教からすれば罪以上の罪なんだろうな。まあ、コイツは恥ずかしすぎて警察にも飛び込めないと思うけれど。痛え。

「な、……コレ、何してる……？」

屈辱？

「……」

気持ち悪い？

「セックス、……だろ」

「セックス……ね」

お前にとって、これは本当にセックスか？ お前の好きな、大好きな女の子としているのと同じか？まあ、お前がそう思ってたんなら別にそれでもいいけどさ。

痛え。寒い。苦しい。熱い。

痛みは先ほどから全然収まらないけれど、そろそろ本当に気絶してしまいそうで、もう終わりにしたかった。紘一の反応を見ている限り、終わりの近くだろう。

そこまで行って初めて、俺は自分に後ろめたさを覚える。痛みからでた冷や汗と一緒に頬を伝った涙は、そんな痛みよりも心の痛みが勝っていて。完全に感覚のある痛みのせいには出来なかった。

これで最後だ。

触れたいと思ったこの体に触れて、体も繋げて。それで嫌われて。
「コ、…ウっ……」

久しぶりに触れたそいつの顔は、俺の冷え切った体より何倍も何倍も熱を帯びていて、初めて寄せた唇はそれ以上に熱くて、気持ちよかった。

「ごめ、んっ……」

強制的に繋がっただけで何も手に入れてはないけれど、俺は確かにソイツを失った。

でもこれは復讐らしいから、別にこれでいいんだって思うことにするけれど、後でどれくらい後悔と未練を覚えるのか。別にそんなものも覚えないのか。まだ分からない。

最初で最後の性行為は、思いのほか痛かった。

いやだから

身体中に回る痛みと体温。収まるのも待たずに、俺は俺の家を飛び出した。

やつちまった。やつちやった、やつちやったよ。

「……」

頭の中がクルクルグルグル、螺旋状に円を描いている。

紘一に何を言われるか、半殺しにされるか、もしか本当に殺されてしまうか。それだったらまあそれでもいいかもしれない。ただ今は気分が悪かったから止してほしいと思い、俺は家を飛び出した。それからもう必死に変な格好で走って走って、走り回っていた。何せ尻が痛い。咄嗟に飛び出したのはいいとして、これからどこに行けばいいんだ。そんなことを考えながら走り回っていた。

そんで最初についたのが近くの公園で、ブランコの上にも座ろうか、とか思った瞬間に尻の痛みが増したり。

痔かつ。

「ふは……」

こんな時にそんな冗談。まあ冗談言つてないとやってらんない状況だったわけなんです。一人で笑ってる俺をつい見た通行人は、変態だ、とか思っただろうな。ははは。

「あは、ははははっ」

笑えないから無理にでも笑った。だって俺今泣きそうだし。でも泣きたくないから、だから笑った。別に他人からどう思われてもいいし。

「……くくっ……ふはは」

あー、そう。俺これからどうしよう。野宿するってのは無理だし、この状態じゃ椅子になんか座れないし。紘一がいるから家になんか帰れねえ。てかアイツ拘束したそのままの状態で家出てきちゃったけどどうしようか。

「お、どうした？　こんな遅くに。さっきのじゃまだ足りなかった？」

結局、仁のところに来た。

「アホか。お前見送りしないで、そのまま鍵開けたまま寝てたら絃一が来た。…さっきの、キス見てたやつ」

「え、え？　修羅場？　修羅場っちゃった？」

修羅場？

「まあ、そんな感じ。今日カノジョ来る？」

「こねえよ？　こんな夜遅いし。てかカノジョじゃねーって」

「……じゃ、今日泊めて。それで、今から俺ん家行つて絃一に会つて来て」

「ええ？　何でだよっ？！　意味わかんねえっ！」

驚いたような、物凄く嫌そうな。そんな感じに大声を上げた。

「手縛つてんの。目隠しもしたけど、よく考えればあれは自力で解けるし。事情あつて俺行くわけにもいかねえし。手の拘束解いてきて」

——お願い…シマス。

仁に敬語使うのは、初めて会った日の一言目以来だった。なんかちよつと嫌だったけど、そういうえば仁は俺の先輩であり年上なわけだから、言いづらいけれどそうお願いをした。

「ん…ま、秀介のお願いなら仕方ないな。分あーかった！　俺に任せなさい」

あつさりとした了承に、俺はため息を吐いた。なんだかコイツは人からちゃんとした礼儀で物を頼まれたら全て受け入れてしまいそう。うで。そんなある日、突然その話を蒸し返して、恩返しを請うたり。

「ああ、それで。俺の携帯と財布も持ってきて、…クダサイ」

追記。

「なんか最後まで棒読みじゃね？」

「そんなこと無いデスヨ」

「本当かあ？ ……じゃ、…行ってくるケド」

「いつてらっしゃい」

頑張つて。

仁の背中にエールを送つて、ドアが閉まった。それから俺はゆっくりと、尻を気遣いながら仁の布団にうつ伏せになった。ようやく体を休める。腕と顔の間に枕を突っ込んで一息つく。混乱していた脳も少しずつ落ち着いてきたようで、俺は除々にいつもの冷静さを取り戻していった。

疲れた。

シーンとしていて薄暗い。この部屋は嫌いじゃない。むしろ俺の部屋よりスキかも。そんなことを思った。

音の少ない静かな部屋は、俺の存在感を薄れさせてくれた。俺が静かにしてればその静かさに溶け込ませてくれる。このまま消えちまいそう。そんな時に真つ暗ならもつと最高。だって俺の姿だつて見えないんだから。

本当に消えてしまえたら、今のところ嬉しい限りです。でもそうは行かないから、俺は今、ここにいるワケなんですけど。

「眠い……」

そんで吐きそう。

で、吐いた。

他人の家で排泄するのにも抵抗あるのに、吐いてしまった。まあ我慢出来る物でもないし、この場合しょうがないとして。俺はうがいしてから、今度は仰向けになって目を閉じた。

「……」

それから吐き気はなく。頭の痛みだけはそのまま残っていたけれど、俺はそのままぐっすりと眠ってしまった。

次に起きた時はちゃんと自分の意思で、誰にも邪魔されずに起きたみたいで、それだけでストレスは少しだけ解消されたと思う。

なかなか空気読めるじゃん。なんて、そんなこと思いながら、何故か俺の横で同じ布団の上で寝ている仁を覗いた。

とりあえず起き上がってみる。

「っ！……いでえ……」

思い切り頭を起こして、ズキンと頭痛が起きた。せきをしてみても痛い。あと尻も安定して痛い。どちらも昨日よりはマシかも。

痛みを無視して辺りをキョロキョロ見ていると、枕付近に俺の財布と携帯が置いてあった。それと同時に、壁にかけてある時計にも目に付く。壁時計によると、ちょうど学校の校舎の門が閉まる1時間前。カーテンが太陽の光を遮っていて、どうも脳内の時間感覚がすつきりしない。

「仁、起きろ」

「あー……んん？」

とりあえず仁を起こして見たが。寝起きの良さに少し驚いた。声をかけた瞬間に反応したわけだから。

「あと1時間で遅刻」

「え、俺遅刻？」

「いやまだしてねえ」

「遅刻しちやってねえの？　じゃいつてきまーす」

「……」

何言つてんだコイツ。

寝起きは良いけど寝ぼけ度がヤバイってヤツか？　また面倒くせえの。

面倒臭いので、頬を一発引っぱたいてやった。

「ど、え……何っ？！」

その瞬間にまたまた驚きの速さで上半身を起こし、目を見開きながら、頬に手を添えて俺の顔をみた。

「朝。後1時間で遅刻」

「まじか。おはよう」

「お前、よくわかんねえ……」

さっきとのテンションの温度差が気持ち悪い。まあ、これでちゃんと脳も覚醒した見たいなんで、俺は改めて気になった事を聞いて

みた。

「昨日、紘一なんか言ってたか？」

「あー……なんか、は聞かれてねえけど。殴られそうにはなった」

そう言いながら布団から立ち上がり、台所で水道の蛇口を捻った。

「え、なんで？」

「何でって、……なんで何だろうなあ。とりあえず手に巻きついたあのテープは取ってやったけどさ。秀介君はアレ、一体何やってたの」

シェービングクリームを顎やら鼻の下に塗りたくったまま、仁がこちらを向いた。

「夜這い」

「……は？」

「いやだから、夜這いした」

夜這い。

その言葉に、仁は吹き上げるようにして爆笑し始めた。何が面白いのか、考えてみれば、まあ笑わない状況でもないのか。俺のあの行動をそんな風にして笑ってくれるのなら、少なからず嬉しいし、それに救われる。

「んで、そっちは何で殴られそうになったの」

笑いが収まつてきたのを見計らって、逆にこっちから聞いてみる。そしたらヒゲを剃り始めた仁が、苦笑いしながら。

「秀介の居場所教える。って言われて、嫌だっけ言ったらいきなり急いで外に逃げたら追いかけてきて、それから少しの間追いかけてっこ状態だったよ」

なんて言うもんだから、今度は俺が爆笑した。深夜に良い年した男子高生が2人して追いかけてっこなんて。一人で公園で爆笑していた俺より変人だ。てか、うん。1回見てみてえっ。

「ギリギリ振り切ったんだけど、何かアイツ必死だったよ」

「まあ……あんな事すりゃあな。俺の事殺そうとも思っただろ」

「そんな感じの必死って風でもなかったけどなあ……」

じゃあ他にどんな必死があるってんだよ。無理矢理入れさせられて、しかもそれが俺と言う男。完全に俺の事嫌いになっただろ。

「お前、学校どーすんの？」

ヒゲ剃りを終えた仁が、今度は制服を着ながら聞いてきた。

「俺……は、今日も休むわ。今日金曜だし。日曜までココ泊めてよ」
今は制服では無いし、高校にいけるような格好でもない。家にも帰り難いし。頭痛がして尻も痛いし。

「そんなん大歓迎」

そんな仁の返答に、自然と口元が緩んだ。

俺等付き合ってもねえだろ

飯を食わせてもらった。……とは言っても、目玉焼き2個とウィンナーとパンという、なんとも質素な朝食なわけだけど、今の俺には反論もできない。

だって一人暮らしの高校生の家に泊まらせてもらってる身だし。目玉焼き2個なんて、全くもって超豪華な朝食だろう。

ありがたくその超豪華な質素飯を頂いて、最終的に腹が3分の2くらい満たされた。まあ、これくらいが丁度いいだろう。

一息吐いて、俺はふいに携帯を手にとった。ほとんど無意識の状態。それを慣れた手つきで、親指を間間に押し込みながら携帯を開いて、ビックリした。

着信47件。

「な、んだコレっ……?!」

昔メールが10件くらい溜まってた事にも驚いたけれど、コレは酷いぞ。

「……?」

着信は、自分が登録していない無登録の番号だった。そのまま番号がむき出しで、誰の名前の表示もない。見覚えの無い電話番号。特徴のある数字番号でもない。

いや、見た事はあっても覚えてはいないだろう。自分の番号でさえ覚えていないのに人のなんて覚えている余裕なんて無いし。

間違い電話?

……間違いでこんなに電話かけてくるか?

「コレ、仁の番号?」

携帯を仁の目の前に突きつけた。

「いや、ちげえよ?」

どうやら違うらしい。いや、そうだったらこんな地味な嫌がらせ……ぶっ飛ばしているところだ。

じゃあ誰だ？ 深夜にこんなに……。

「……紘一？」

いや、違う違う。アイツは違うだろう。だって俺、最近メアドも番号もコレに変えて、紘一には教えていない。中学時代の友達が教えたか？

それなら一回くらい『教えてもいいか？』とか、なんかそんなメルだって来るだろう。俺が紘一を拒否し始めたのは中学3年の最後くらいで、それは仲の良い奴等も見えていて知っている。

俺が意図的に紘一にアドレスを教えていない事は、容易に想像つくだろう。

「なんか、……気持ちわりい……」

「無視しとけて、無視無視」

「無視出来るレベルじゃなくねえ？」

「それでも無視しなつてば。今度かかってきたら俺が出てやつからっ！」

「アンタこれから学校じゃん」

「そうだけど、……」

いいよ、今度電話きたら俺がちゃんと解決するし。なんて言つて俺は携帯画面を閉じた。184をつけて非通知設定にもなつてないんだし。

嫌がらせじゃないって可能性もアル。本当に間違い電話で、それに気付かず50回近くかけ続けたとか……。

それでもストーリーカーみたいなモンだけど。

「バスの時間大丈夫？」

「ん、もう行く。行つて来ます」

「いつてらっしゃい」

「いつてらっしゃいのチューは？」

「は？」

「だからチュー。よく新婚さんがやってるやつ」
どこまで脳内バラ色一色に染まってるんだ……。

呆れる通り越してドン引きだ。

「俺誰とも結婚してねーよ。つか、俺等付き合ってもねえだろ。早く行け」

「つまんねーのー」

そっぴい唇を尖らせて、仁は家を後にした。

「あ、そうだ。マナーモード解除しとかねえと」

昨日の朝、マナーモード設定に気付いたままそのまんまにしておいたから、仁の着信にも、コレにも気付かなかった。今度電話がきたらすぐ気付くように、マナーモードを解除しておいた。

オリジナルで設定しているから、俺の場合バイブも何もない。着信中に携帯の表面のライトが光って、それだけ。

「てかほんとにスゲー電話してきてんな……」

その47件を画面上に流し見て、改めて驚く。最後の電話は2、3時間前。それまで電話していたって事は、コイツがもし学生とか社会人なら2、3時間しか寝てねえのか。

ニートなヤツだったらまだ寝てると思うが……。

次はいつ来るんだろうか？ この時間に来ても別におかしくはないし。……かと言って予測は全くつかない。

まあ、気長に待てば……。

そう軽い気持ちになり、俺はまた友達に学校側に休むと伝えてとメールを打った後、母さんに土日泊まる事を連絡して、仁の部屋を物色し始めた。

学校を休むと言っても、その分のスケジュールはスッカラカンなわけで……。何かすることないかなー、なんて思った時に、クローゼットの上の棚の中から、漫画を大量に発見した。

エロいとか、そういうんじゃないで、本当に、少年向けのファンタジー戦闘漫画。それを見つけた瞬間に、今日は暇する事もないか……なんて思った。

棚から、とりあえず本を一括して10巻くらい取り出した。あんまりアニメや漫画に興味の無い俺でも知っているような最近の有名

漫画。

どんな話だったか……と、俺は机に肘をついて漫画の表紙をぺらっとめくった。

それからはもう黙々と何かに取り憑かれたように漫画を見続けていた。思った以上に面白くて、妙に心を揺さぶるというか、自分もこれを買おうか。なんて、そんな気さえ起きてきた。

「……」

何時になっただろうか。もうずっと読んでる気もするし、そうでもないような気もする。集中しすぎて、他の事に気が回らない。

そんな中、ふいに携帯が音を立てた。メールではない着信音。

無意識に携帯を手に取り、漫画を読みながら器用に画面を開く。

その時の俺には、もう47件と言う数字はどこにも無くて、その存在すらも忘れていて、半ばイラつきながら、『こんな時にかけてくんなよ』的な感じで通話ボタンを押した。

「もしもし……」

イラつきながらの共通挨拶。

「……」

返答がない。無言電話？ それならそうと、切っても別にいいだろう。今は許してやる。

そんな風のため息を吐きながら通話を切ろうとしたときに、声が聞こえてきた。

「いきなりあんな事して、いきなり放置したまま出てって、電話も出ないで、今どこいんの？」

漫画が手からすべり落ちた。

待ても言わせまいとページはペラペラと高速で閉じていく。表紙が見えた時に、俺は息を飲んで今までの状況を思い出した。

47件。いきなりあんな事ってのと、いきなり放置ってのと、電話も出ないでってのとかが。

「……ねえ、早く。そこ、今どこいんのって聞いてんだけど——」

人を好きになるって事は本当に

「つつか、戻ってくるかと思って待ってたら、案の定あいつ呼びやがってさあ……」

何やら電話の向こう側で一人ブツブツ呟いている絃一。

肘をつくテーブルの上に落とされた漫画は、表紙カバーが少しだけズレていた。カチコチと、いままで聞こえなかった時計の音や、その他気にならなかった小さな雑音が、妙に馬鹿でかく聞こえる。

俺は今、一体どんな状況に出くわしているんだろう。

47件と言うストーリーカー、変態並の着信数を叩き出したヤツと通話している。その少し前に俺はコイツを夜這いして、その癖放置したままその場を逃げ出した。

その後のこの『今ドコ?』なんて聞いてくる声に、焦りは頂点に上っていた。

気持ち悪いんじゃないのか。気持ち悪いよな。心の底からそう言ったから。それなのに何でここまで突つかかる?俺はお前に嫌われたくてやったんだ。わざとお前を傷つけるような事して、離れようとしたんだ。

なのにコレは――。

「……違うだろ」

「は?何が……」

思い描いていた結末と違いすぎている。

『キリスト教じゃ、同性愛は罪らしいよ。』

何の罰だ。

同性の幼馴染を好きになった事か?復讐なんて言って夜這いした事か?でも、それもこれも全部、嫌われる為じゃないか。

罪って言われない、罰なんか受けない。そんな『普通』に戻ろうとしたからじゃないか。別に気持ちの同意なんか望んでない。コウに好きになってもらおうと努力なんかした事もない。何も望んでな

んか無いし、むしろ失おうとしていた。

もしかして。

好きになった時点で駄目だったのか？

「幼馴染なんかやめる」

それはどんな、地獄だ。

「はあ？　ちよっ、シユウ。お前ホント何言って……」

「知り合いってのも元クラスメートってのも、全部やめる」

「なあ……。今さ、……。どこいるの？　教えてよ。会って話し、しようよ。な？」

じゃあ、会ったらもつと好きになるから駄目じゃん。会ったび好きになつて、その度俺は罰を受けるのか？　もしかしてコウも罰とか受けちゃうわけ？

「一生会いたくない」

なんて地獄なんだ。

「シユウ、そんなに俺の事嫌い？」

ああ。人を好きになるって事は本当に、不幸な。

「嫌いだよ」

俺はお前が。

「嫌いなんだ」

好きだから。

お前の好きな女の子じゃない。男だ。家族でもないけど、兄弟でも障害者でもないけど、年の差も無いけど、男だよ。

「ちよ、っ待て。俺は嫌だぞ！　切るなよ！　切ったら一生お前に纏わりついてやるっ！　ふざけんっ！　おいシユウっ！　しゅっ

……」

俺の名を呼ぶ声に愛しさが増して来たので、とりあえずそのまま通話を切った。すぐにまた掛かってきた電話には出ず、そのまま携帯の電源を切った。

心臓が震える。

嬉しいからか、寂しいからか、悲しいからか、苦しいからか。多

分全部。

「……はっ」

短く吐き捨てるように笑みを放って、こう思った。

「ざまあみる」

祝福してやる、お前の事。ざまあみる。コレでもう少ししたら、お前を想う俺なんか消えて居なくなる。

ざまあみる。泣きそうな俺。今は多分、泣いて良いよ。人ん家だけど、誰もいねえ。この家じゃもう吐いたりしちゃってるし、大丈夫。それに今は一人だから。だから今は泣いていい。

今は苦しくても、コレを乗り越えれば、俺はいつか幸せになれるんだろうか。『普通』に戻って、『普通』になって、『普通』を歩んで。

そうなってくれば、きつといい。

「っふえ…うう、うー…」

思考がGOサインを出した瞬間。両目から涙が大量に溢れ出した。止めどないソレは、まるで俺の心の中を洗い流してくれているように見えた。

不純で、汚く、濁ってて。

なんか、変なの

「ただいまー」

明るいうつな、焦げているような、そんな夕空を背景に俺にそう言った仁に、少しだけ焦っていた。

「おかえり」

つい数時間前まで男の癖にうずくまっていなかった。泣き疲れてしまいいは寝てしまって、結局起きたのはつい数十分前だ。

ていうか俺最近寝すぎじゃね？　なんて思いながらも、置いてある等身大鏡で自分の顔を覗いてみれば、目の下が赤くなっている。これじゃ普通に泣いていたとバレてしまうし、しかも相手は仁。

急いで顔を洗ったり。効果は分からないし多分無いと思うが、赤くなってる部分を指の腹でぐりぐり引っ張ったりしていた。

仁には、紘一が俺の知り合いと言う事と、昨晚……というか、今日のまだ外の真っ暗な朝の時間に夜這いした。と言う事だけ伝えるある。

俺が紘一の事を好きと言う事に気付いているのかは知らないが、聞かれたくはないし、答える気もない。

「今日も学校すげー疲れたっ」

「お疲れさん。あ、……冷蔵庫に入ってた麦茶。勝手に飲んだけど」

「あー、全然オーケーオーケー。なー、俺いなくて寂しかった？」

「いや、全然」

「なんだよ……もう少し、こつ。デレ？　って言うのか？　萌えるような要素を……」

少しの間、泣いてたかと質問されるか気になっていたらけれど、話しは時間が経つにつれ全く違う内容に変わっていついて、少しだけ安心した。

それが気付いているのにあえて聞かないという仁の配慮ならば、ナイス判断と褒めるだろう。

「あ、そだ。今日の夕飯どうする？」

「何でもいいよ、……てか仁いつつも何食ってんの？」

「カップ麺、コンビニ食品、スーパー惣菜、出前、ファミレス」

「ろくなモンねえな」

少しでも料理の作れるようなヤツならこんな状況、『自分が飯作ってあげますよ』なんて言って作ってやるんだろうけど、生憎俺にはそんなスキルは持ち合わせてなかった。

「俺飯作れねえぞ」

インスタントラーメンやお茶漬けや玉子焼きとか。そんなモノなら普通に作れるけれど、……これじゃ夕飯を作ったとは言えない。

「俺もー。ファミレス行く？」

何でもいいと言っておきながら、俺は今更になってから考える。もし外にでて、ばったりでも、紘一にあってしまわないだろうか？　ここは俺ん家からは徒歩20分かかかるくらいに遠いけれど、偶然のばったりだとか、……無いとは言えないだろう。

「んー……あ、出前いつも何取ってんの？」

「出前、はー……蕎麦、ラーメン、ピザとか。それくらいか」

外出はやめとこう。

「ラーメン取ろうよ。俺ラーメン食いたい」

「……わあかった！　んじゃラーメンなあ」

夕飯にはこの時間帯には早すぎて、ラーメン屋の出前チラシを持ってきて早々に電話をかけようとした仁を止めた。

それからもう、高校男児らしい遊びをした。TVゲームをしたり、漫画を見たり、くだらない雑談をしたり。

本当に普通すぎて、俺はおかしいなと思った。

外が薄ぐらくなってきた、二人ともそろそろ小腹が空いてきたとき、ラーメン屋に電話をして注文をとった。2〜30分くらい経ってからラーメン屋がインターホンを押し、割り勘で代金を支払う。

食べようと、一旦遊びを中断して二人してテーブルを囲んで一息吐いている時に、俺は仁に聞いてみた。

「なあ、何で今日やって来ないの？」

「んー？ 何を？」

「いや。だから、性行為……？」

土日を除いて、ほぼ毎日。週5、学校を終わってからのほぼ毎日、この家についた瞬間に俺を押し倒してくるコイツが、今日一度もそうしていない。

「今日はしねえ」

「ふーん、……そう」

「ホラ、食べようぜ。いただきます」

気のせいだろうか。話を逸らされた気がした。

「……いただきます」

今日は金曜日。おとついても、昨日だってやった。なのに金曜日の今日はやらない？ 偶然か気のせいか。それとも土日やり通すって腹か？

「秀介、飯食い終わって一息ついたらコンビニ行こうぜ。飲み物と菓子買って、今日は徹夜な。明日休みだし大丈夫だろ」

「ああ、うん」

今日は徹夜……とか言ってるけど、コレは俺が思っているような事は一切しないつもりだろうな。言葉に裏が無いし、飲み物とお菓子って付録が付いてるから、普通に男子高生をやるのだろう。

「……」

なんか、変なの。

もしそれを伝えたら

不自然と言うほど、何にもされなかった。

日曜日の午後7時。俺は辺りを見渡しながらゆっくりと、それでも早く確実に自分の家の帰路を急いでいた。

着替えが無いから、仁にTシャツとデニムを貸して貰った。背丈もそうだけど、何気にアイツの足が長くてム力ついた。俺が履くと綺麗に裾が余ってる。

ム力つきながらも、俺は奇妙だと、無意識に眉をしかめた。

一緒にずっとアイツの家に居て、一回も性行為はされなかったからだ。別に俺が溜まっていると言うわけでもないし、尻がまだ少し痛いからそれは凄くありがたかったんだけど……。凄く不可解だ。

土日にはしない主義なのか？とか思ったけど、それは普通にかしいし。ていうか性欲の力ケラも見せないそいつが普通にかしい。

「やっぱなあ……飽きられたかな」

所詮男だし。それは仕方ないとして。それでも、もう一言何か言ってくれば良いんじゃないかと思う。飽きたなら飽きたできっぱり切ってやるし。

俺は仁は好きにならないから、後々面倒臭い事にもさせない。

「はあ……」

月曜改めて聞いてみるか。

なんて、そう思いながら、カーテンの閉まっている自分の家を少しばかり眺め、ドアを開けた。ただいまと口にすると、そりゃまあ凄い勢いで母さんがかけよって来て、あろう事か俺に抱きついてきた。

「ちよつ、わ！ な、なんだよ?!」

「何だよじゃないよ！ どこ行つてたのー?!」

高い声が耳に響いて非常にうるさい。余り力を入れずに体から母

さんを離れた。いい加減子離れしろ！

「どこって、ちゃんと連絡したじゃん。友達ん家だよ」

「なんで携帯の電源切ってたの？ 何回も連絡したのに出ないから心配したんだよー?!」

涙目でそう言われ、ウザいなあとか思いながらも、俺は電源を切りっぱなしにしていた事に気付いた。デニムのポケットから携帯を取り出し、画面を開いてみる。

「あー……ごめん。充電切れてて、友達と機種違うから充電できなかった」

そんな嘘を吐いた。

「あれ？ 絃一君それと同じ機種じゃなかったっけ？」

「は？ 何で絃一が出て来るわけ」

「友達って……絃一君の事じゃなかったの？」

呆れた。

自分の母親からはまだ自分と絃一が仲良しこよしの友達だと思われていたとは……。いや、まあ現状を話した事はないんだけど。ていうか、絃一関連の事を聞かれたら軽く流したっけ。

「絃一じゃないよ。高校の先輩んトコ」

「あらー。今度連れてらっしやいよー！」

「ああ、……うん」

金曜に来ただけど。……まあ、いい。

「飯ある？ 夕飯食べてきてないんだけど」

飯ある？ なんて聞かなくても、あるって事は分かっていた。だって自分の家だし。いつも夕飯の時間は7時前後だから。

「もう少しで出来るわよー、手洗って居間来なさいねっ」

「うん」

それからキッチンに戻った母さんに背を向け、自分の部屋へと向かった。仁のTシャツとデニムを脱いで、軽い部屋着に着替える。

携帯も充電器にさした。充電中サインの赤いランプがピカッと光る。電源はつけなかった。

それから階段を下りて洗面台に向かい、母さんに言われた通りに手を洗ってから食卓へと向かった。並べられている料理は母さんと俺の二人分。

「父さんは？」

「明後日帰って来るわよ」

「ふーん」

そういえば父さんは出張中だった。だから母さんはこんなにハイテンションなのか……と、心の中で納得した。別に嬉しいからじゃない。夫婦仲は上手く行き過ぎで、俺の立場からしてもイチャイチャしすぎだと思っくらい。

そんな父さんが居ないから、母さんは寂しいらしい。寂しさを紛らわすためのハイテンション。土日は一人で本当に寂しかったんだろうなあ……なんて母さんを小動物みたいに例えてみた。

「いただきます」

「召し上がれー」

千切りキャベツに、豚カツ。豆腐の味噌汁と、昨日の残り物らしき豆とヒジキの煮物が小鉢に入っている。

「美味しい？」

「つままい」

米を頬張りながら心からそう感想を言った。

そういえば、金曜日を含め、この3日間は平和な時間だった。性行為はしないし、普通の高校生をしていたと心から思う。それに絃一とは会わなかった、……何かしてないと絃一を思い出したけど。飯を食べ終わったら携帯の電源でも付けて見ようか。

「そういえば……こないだくらいに、絃一君いつも家に来てたけど。秀介いつも会ってなかったね。……もしかして喧嘩した？」

事情の知らない母。

「あー……うん。そんな感じ」

「喧嘩は駄目よー。ちゃんと仲直りしなさいね？」

「……」

声には出さずに、その言葉にただ頷きだけはした。ただの喧嘩なら容易く仲直りも出来ただろうに、これはただの喧嘩じゃない。喧嘩って言っているのかどうかも危うい。

この場合、仲直りと言うのはどんな物なのだろうか。ごめんねと言えは良いって言うような軽いものじゃないだろう。それに、俺は紘一と友達に戻る気もない。

「いつもとは違う、結構激しい喧嘩しちゃって。……謝っても許してもらえなさそうなんだけど。そういう場合どうすればいいの？」
遠まわしな言い方で母さんに聞いてみた。実際は激しい喧嘩よりも激しかった。

「そうねー……」

んー、と少しの間、空中に視線を移していた母さんが俺を見た。「何でそんな事したのか、これからどうして欲しいのか。それに、謝罪。……自分の気持ちをやんと漏らさず紘一君に伝えればいいんじゃないのかな？ 秀介がちゃんと言えば分かってくれると思うわよ」

「うん、ありがと」

すっかりしなさいよーと言う母の声は、俺の中で小さな音となって消えていった。

何でそんな事したのか、これからどうして欲しいのか。謝罪。もしそれを伝えたら、紘一は一体、俺に何と言っだろうか。

人の事は言えない

「ごちそうさま」

「はい」

食器を重ね、両の手を出した母さんにそれを渡す。グラスに入った麦茶を飲み干し、それも母さんに渡し、少しだけ一息吐いた。

母さんが食器を洗い、俺はそのまま椅子に座りながら、少しばかりそんな状態で母さんと話していた。親子会話と言うか、……まあ色々。

腹の窮屈な満腹感が緩くマシになってきた所で、俺は食卓を後にした。居間を抜けて階段を上がり、自分の部屋へと戻る。戻ってきてそのまま机の前の椅子に座った。

まだ充電中のランプが付いている携帯を手にし、溜め息を吐いた。それから意を決したように画面を開き、電源をつける。

ちゃんと起動するまでの数十秒の間の時間が、凄くもどかしかった。

「あれ」

前は数時間で新着47件。それから3日開けてる。今度はどんな酷い数字を指しているか気になっていたが、以外に少なかった。

「23件……」

いや、俺の日常からしたらこの数字もある意味で凄い数なんだが、……47件と比べりゃ偉い差だ。

このうち、母さんの着信が5件、何故か仁からの着信も2件程あったから、実質絃一からの着信は15件くらいしかない。

「今のうち着信拒否しとくか」

冷静な判断。

履歴を見とけば最後の着信から6時間くらい経っている。まだかつて来ないうちに着拒して置けばいちいち電源を切ったりマナーモードにしておかなくても大丈夫だ。

設定が完了しました。なんて文字がご丁寧に出てきて、少しばかりの安堵を覚えた。

ていうかアイツ、なんで俺の携帯番号分かったんだろつか。

「あの日か……？」

夜這いしたあの日。携帯と財布を忘れて……あの時携帯の個人情報見られたとか。いや、それでも端末の暗証番号入力しなきゃだし……。

「……やっぱ自分の誕生日ってのは駄目だったか」

いつも携帯の暗証番号はゾロ目数字だったり自分の誕生日や生年月日だった。そんなすぐ分かるようなものじゃ暗証の意味が無い。

不覚だった。

それにもう一つ、不覚だった事がある。

「指までガツチリ固定しとくんだった……」

ビニールテープで紘一の手をガチガチにコーティングする時、指の間感覚さえなくなるようにしとくんだったと思った。巻いた所は手の付け根で、それで充分だと思っていた自分の負け。

まさかここまでしてくると思っていなかったんだから。……ていうか、本当ならそこまでしてくる方がおかしいんじゃないだろうか。うん、本当におかしい。

異常だろ。

『てめえ、気持ち悪いよ』

「お前もじゃん、気持ち悪いのって……」

人の事は言えない。

まあ、気持ち悪いの意味合いは違うし、俺の方が気持ち悪いのはわかってただけどさ。こんな気持ち悪い奴に気持ち悪い事して、何が楽しいんだ。

それならいつも通り、俺なんか放つといて女を抱きにいけないんだ。

「これからどうしようかな……」

明日からは今まで以上に張り込みがエスカレートしそうだ。夜這

いしたし、着信拒否したし、……嫌われる為とはいえ、いろいろ酷い事をした。

『それと、謝罪』

母さんの言葉が脳裏に再生される。

……謝れば、許してもらえない事じゃない。何でこんな事したのか理由を話せば、多分、殴られる。ボコボコかどうかは知らないけれど、殴られる。それで、これからどうしたいのか話したら……。

「話せば……」

話せば、……分かってもらえるだろうか。

アイツは、そんなに物分かりの良い奴だったろうか。

何回も何回も何回も何回も

「俺は紘ひろ一と違って好きな人としかないんだよ」

あの会話以来秀介に拒まれている。嫌われたんだろうか。嫌われたなら別にそれでもいいような気がする。別に俺とアイツは恋人同士ってワケでも無いし、そもそもアイツは女でもないし。

俺の今まで想っていたアイツに対する気持ちがおかしかったワケで、コレを気に全てを無に出来たんならいいかもしれない。

それでも、ワザと携帯を秀介の家に忘れてみようと思った。最後の望みだったかもしれない。やっぱり上手くはいかなかったけど。それでもいいさ、忘れよう！ 女だ女、女抱こう！ 可愛いくて柔らかくて、触り心地が良くて、気持ち良い女を抱こう。すぐに忘れる。

次の日には、女を誘っていた。だけど抱けなかった。

いや、相手はちゃんと居たんだ。相手も俺もやる気満々だったのに、俺のがやれなかったただけなんだ。ずっと秀介の顔が思い浮かぶ女の肌を舐めても、ずっと秀介ばかりが頭ん中にいる。女の顔見て忘れようとしたら、案の定、抱けなくなった。

「……なんで……」

怒った女を謝りながら家から追い出して、ベッドの上で理由を考えていたら、やっぱり理由なんか秀介しか思いつかなくて、ムカついた。

めちやくちやムカついて、俺は秀介の家に突撃した。インターホンを3、4回連打して、扉から出てきたのは秀介の母さん。

「あの子、今居ないの。……って、秀介がそう言ってる……」

秀介居ませんかって聞いたなら、秀介の母さんがそう言った。だからもつとムカムカした。すぐそこにいるのに声をかけられなかったって事は無かったから、だから異常にムカついた。

そんなムカつきを抑えて今日のところは一先ず帰ってやる。

そう思つてその日は歸つて、また次の日の放課後に来た。同じ事を言われて、同じ事を思つて。次の日もその次の日もそうだった。

1週間くらい経った頃。

非常に悲しくなった。

泣きたいとか、そんな事じゃない。もつとドロドロで、酷い感情だった。何ですぐ目の前に居るのに話せないんだ。近寄れない、触れない。でもそれは何かの因果とかじゃなくて、秀介の意思なんだと分かっていると、何か怒りが溢れ出した。

悲しみから怒りになって、怒りが欲望に変わった。いつまでも秀介の顔が浮かびあがってきて、心でソイツに会いたい会いたいって連呼している。

胸が苦しくて、窮屈で、息苦しくて。その欲望が液体と言うカタチを成して体から放出された時は、つらくて、今度こそ泣きたくなつた。

何で俺がこんな思いしなくちゃいけないんだろうか。ただ俺はお前に会いたくて、お前と話したくて、お前の顔が見たくて、お前の傍に居たかっただけなのに。

なんでお前は俺にこんな思いをさせるんだろう。

それから。

2週間と、数日が過ぎた頃。

俺の怒りが爆発した。

今日こそ会つてやるぞこの野郎。居留守使いやがつて。もしまた居留守なんか使いやがつたら、窓割つてでも会つてやる、帰れなんか言いやがつたら、無理矢理服脱がせて身動き取れなくして有無言わさず抱いてやる。窒息しそうな程キスして、それからそれから……。

――。

シユウが男とキスをしていた。

変態的な事を考えていた、ふいに顔を上げた時。数十メートル先の秀介の玄関だ。爆発した怒りとそれ以上の驚きで、俺は多分凄

顔をしていたんだろう。

俺がその場に出っ立っていたら、秀介が俺の存在に気付いた。驚いた顔もしていたが、それもすぐ止み。相手の男を自分の家に入れたから、自分も家に上がって行った。

おいおいおいおい。何してんだ秀介。お前、何ソイツ家に入れちゃってんの。俺の事は家にも入れさせてくれなかったのにそいつはすんなり入れるのかよ。おかしいだろ。玄関前でキスして、それから家に入れて何すんの。なあ。

無意識で駆け寄ったその家のドアは、ガチャガチャと言う音を立てるだけで、1ミリも隙間を見せなかった。

キスした相手を家に入れて何すんのなんて、女じゃないが、何力マトトぶってんだと、そんな質問をした俺を馬鹿馬鹿しく思う。

いや、でもあれだ。キスはしたけど、家上げた全員が全員セックスするわけじゃないんだし、アイツ、秀介は違うよ。そうだ。ただ一緒に勉強したり、なんか……そう、ただの友達だろ。アイツは、あの男は。

……。

インターホンを押して邪魔しようかと思ったが、手が竦んだ。一刺し指がそのボタンに後0・数ミリでくっ付くつて所で止めた。

『俺は紘（じゆうち）一と違って好きな人としかないんだよ』

もしシュウが。……もしかして、本当にあの男の事を好きだとしたら。俺にはそれを止める権利なんかなかった。俺は好きじゃない女と沢山している。それまで悪い気なんてしなかった。だから、今は自分の体が重く感じるほど後悔している。

ごめんなさいって心の中で何回も謝った。

自分の家に帰って、すぐ風呂に入って何回も体を洗った。今までの女との事を全て洗い流そうなんて、そう思いながら何回も何回も何回も何回も体を洗った。

こんな物理的な事で洗い流せない事くらい分かってる。心の中で何回も謝ったって、それじゃ駄目な事を今知った。

初めて自分が憎いと思った。

普通って、なんだ

ずっと風呂で自分を洗っていた。頭洗って、リンスして、体洗って、体洗って、それを必死で何回か繰り返していたと思う。手が疲れたからずっとシャワーを浴びてて、したら母親にいつまで入ってんだって怒られて、それで風呂からあがった。

部屋に戻って時計を見ると、帰ってきたときからもう1時間は過ぎていた。多分2時間は経ってないから、大体は1時間半くらい。

1時間半も風呂に入っててずっとシャワー付けてりゃ、そりゃ怒られるな。なんて反省しながら、頭がボーっとした。

「シュー……」

俺がそう呼びかければ必ず何か返してくれたのに、帰ってくるのは時計の音。

これからどうすればいいんだろう。

体を洗っても洗い流せない事をした。謝っても許しては貰えない事をした。だからさっきも秀介の邪魔なんか出来なかった。俺にはそんな権利が無いからって理由。それに否定が出来ないから、こんなに苦しい。悩んでいる。

秀介は今アイツとセックスをしているんだろうか。密着して、抱き合って、名前呼んで、キスして、好きとか言ったり……。

『俺は紘こいつ一と違って好きな人としかしなんだよ』

本当に好きなのか。俺より過ごした時間が少ないソイツの方が好きなのか。よく考えたのか？ ちゃんと悩んで決めたのか？ 軽く決めたんなら、早くと別れる馬鹿。俺の方が格好良いだろうが。背だってお前より高いって共通点があるんだし。

さっさと俺んとこ戻って来いよ。

「って……気持ち悪い」

そこまで思って、今の俺が物凄く気持ち悪い事を考えていたと分かった。秀介は男で……これはおかしい。別に思っくらい良いけど、

コレは駄目だ。

何思ってたんだ。

マズ、秀介がああ男とキスしていた時点で気持ち悪いと思わなきゃ駄目なんだ。それが普通なんだ。それなのに、早く別れるだとか俺のところに戻って来いだとか。そもそも付き合っても無え。

「……」

でも、まるで付き合ってるみてえにいつも一緒にいた。秀介に避けられ始められた時には、自ら寄っていった。アイツも口だけで、そこまで拒否もしなかった。何か物足りない気がしたけれど、それでも楽しかったし嬉しかった。

こんな気持ち悪い事考え始めたのは、数週間前から、今まで以上に避けられ始めてからだ。姿が見えない、顔も見えない、喋れない。存在がすぐ傍に無い。

これは焦りだ。

そう結論付けたら、気持ち悪くても納得できるかもしれない。

「だって、……」

だって俺は秀介のことを――。

「っあー……」

俺の脳や思考は普通とは違っている。

女は確かに好きだ。だってそもそも女だし、柔らかいし、甘いし、可愛いし、小さいし、か弱いし。秀介とは大違いだ。何が違ってる性別もそうだけど、好きの基準が違う。

女は好きですか、それでも無いですか。

好きかそれ以下かって聞かれたら、好きだって答える。そんなに好きか嫌いかって聞かれたら、口では絶対好きって言う。そんで心の中で、それでも無えって答える。

秀介は嫌いですか、大嫌いですか。

嫌いか大嫌いかって聞かれたら、大好きだって返す。その大好きの中にはいろんな意味の大好きが含まれている。だから、好きか嫌いかってきかれたら、口では好きだって言う。心の中ではもうそれ

は大好き以上の何かになっていて、ソレが容量オーバーで破裂しないように制御するのでいっぱいいいっぱいだ。

だから女は秀介とは大違い。

——じゃあ、好きって言えばいいい。

でも好きって言ったらアイツは100%冗談として受け取るから、それが嫌だ。怖いと言うか、恐ろしいと言うか。

『俺はまだ誰にも好きって言った事は無い』

秀介にも言った事は無いし、他の誰かに言う気も無いが。この先数年数十年経って、今のままの状態ですつと好きって言えないまま人生終わったらどうしよう。

——もう言えよ。

駄目だ。そんな投げやりな好きじゃ俺の気持ちは伝わらない。だって、ほら。俺こんなんだ。……こんなんで、女をとつかえひつかえ抱いてるって事。

なんで抱いてるかって聞かれたら、これは本当ベタなんだが、『身代わり』『心の制御』だ。自分の気持ちを抑える為に女を抱いた。だからごめんなさいって謝ってんじゃねえか。

男と女がセックスするのは普通だ。男と女がキスするのは普通だ。男と女が抱き合うのは普通だ。イチヤつくのも、手を繋ぐのも普通だ。

そんな事を秀介とやりたいと思ってる俺は異常だ。異常だから気持ち悪い。だから普通の事をして普通に溶け込んだ。こんな理由だから許されないって言ってんじゃねえか。

異常な俺が普通に普通な事して普通になる。それが正常な事で普通で。そう、普通だから。普通だろ、普通。普通だし、ん、普通？アレ。

「普通って、何だ」

一体何が普通なんだ。

普通って、人間が生きていく中で創り上げた常識。

そう答えを出せば、また違う疑問が生まれる。

『常識って何だ。』

……飯食うときに箸使う事か？ んなの手で食う国もありやそれ以外しか使えないってところもある。義務教育か？ 世界見りや勉強出来ない人だっている。UFOだって幽霊だって、信じる奴もいれば信じない奴もいて人それぞれだ。

そう、人それぞれ。

何が普通なんだ。

今、現代にこんな感情持つような俺が居るってのに、過去昔にいない筈がない。

俺は、異常者か？ 昔から異性を好きになる奴がいるように、昔から同性に行為を抱く奴だっていただろうに。

同性に行為を抱く事が異常だってんなら、異性に行為を抱く事が異常だって言う奴もいるかもしれない。そいつにとってはそれが普通なんだろ。

「不確か。」

……ああ、それだ、不確か。『普通』ってのは不確かなモンじゃねえんだろうか。

ていうか、考えてみれば世界に何十億人いると思ってたんだ。その中の一人だぞ、俺は。アリ以下だ、微生物。そんな俺がどうしてそんな『普通』に付き合わにゃいけねえんだよ。

別に人に迷惑かけるわけでもない。黙ってりゃ秀介しか気付かねえもんだ。

俺は……想い思うままに行動してもいいんじゃないのか。秀介に気持ち悪がられりゃソレはソレで。まだやっても無い事に、それこそ馬鹿だろ。

だから俺は俺のしたいまま、気持ちに従っていいんじゃないのか。……そー、だよな」

それなら、こんなトコでぼーっとしてるよか行かなきゃいけねえところがある。心で謝るなら、直接会わなきゃ言けねえ事もある。

「絃ー！。ごはんだから早くきなさい？」

母親の俺を呼ぶ声。シンクロするように部屋を飛び出し家を出た。
母親の怒鳴る声なんて今はしらねえ。
全力で走った。

そんでついに、爆発

やる事がある、とか言っただけ、いざ家を飛び出してしまえば、何をやればいいのかわからなくなってしまうって、とりあえず単純にセックスした事のある女に会って謝って回った。

携帯の電話帳は男の友人も含め100を超えた人数の番号が登録してある。その中にはまだやった事の無い女だったり、もう連絡の取ってない女も登録してある。

この中で今もまともに連絡取ってる女つてのは20人もいないだろう。

今から会いたいとそう俺が告げれば、相手は120%セックスするんだと考えると思う。だがそれは仕方ない。会って謝って、それで終わりにしよう。関係を切ろう。

連絡して時間の都合が合わなかった女は後日に回す。今会えるのならすぐに会って謝りたかった。悪いとは思ってる。それでいますぐにでも秀介に会いたかった。

「えー、別にいいけど。紘一結構良い感じだったから少し惜しいけどさあ。何でいちいち謝るワケ？」

「酷いよ紘一君。だって私…初めてだったのに……いやだよっ！」

「……うん、…分かったっ！ 許す！ お幸せにね！」

三者三様だった。

俺と同じくセフレだと思っていなかったり、純粹に俺を好いてくれてる子だったり、こんな俺を笑顔で許してくれたり。こんな様々な性格の奴らを一つの女力テゴリに納めていた俺は本当に馬鹿それで、必要もなく意味もなく俺と言う存在で縛りつけていた。きっと、俺と体を合わせていなくても今頃、本当に好きな奴が出来てたかもしれない。付き合っていたかもしれない。

悪いのは全て俺。

*

大体の女に会って謝り終わったのが12時くらいだった。1時間くらい対で喋った奴だったり、それこそ2、3分で話がついたりした奴もいた。もちろん誰一人ともやってはいない。

家に帰ろうとした帰路で、何を思い立ったのか、俺は秀介の家の前に足を止めた。

秀介の家を通って帰るのは遠回りだったけど、いつも苦にはならなかった。行けば秀介の顔が見れて、本当に幸せな時間だったかもしれない。今いってもそんな気分にはなれないだろうに。……それに、まだ全てが終わったわけじゃない。顔を合わすのはまた後に――。

「……寝てんのか？」

どこにも家の電気はついていなかった。居間もちろん、秀介の部屋も。

あいつは帰った？ 今秀介は一人？ もしあいつが寝泊まりしていたら……。

そう思うと、またふつふつと怒りが沸き上がった。まだ怒れる立場でない事は分かってるが、怒りが沸き上がった。それと同時に募る、『少しでも』と言う感情。恐る恐る家のドアノブに手をかけた。開かなかったら帰る。開かなかったら帰る。全て終わってから会おう。いや、でも、もう今でも……少しでも。顔が見たい。すぐそこにいるんだ。あいつがいたら帰るから。だから少しでも――。

耐久力や我慢なんて言葉、即効砕け散った。

カチャッと、軽い感覚がした。不思議に思っただけ手前に扉を引くと、鍵にも何にも邪魔されずに力に従う。心臓がバクバクした。

会える、かもしれない。

でも、あいつがいたら帰る。あいつが、いたら帰る。

「……」

開いたドアの先には、見覚えのある玄関。少しの装飾が変わって

いるって事にも気付いた。一步進んで、暗い部屋に緊張感が走る。

あいつが『いなかったら』って言う選択肢を考える事を、忘れていた。心のどこかで、絶対に居るとでも考えていたんだろうか。

あの男は、居なかった。

玄関の男用靴は秀介の靴しか置いていない。あとはハイヒールだったりブーツだったり。見覚えの無い靴は置いてなかった。

じゃあ、この2階へ繋がる階段を登っていった先には、秀介がいる？ 今は寝てるから、もしかしたら俺が2階に上がって秀介の部屋に入ったって気付かないかもしれない。

会いたい。

顔が見たい。

それに合わせ、階段が音を立てた。

「シュー」

声にならない声でその名を呼んだ。返事はない。だから、まだ大丈夫。なんて欲が生まれた。

2階にある1室のドアノブを捻り、少しずつ少しずつ開けていく。変わらない暗い空間。変わったのは、空気だった。

この雰囲気は、よく知っている。

事後の匂いがする。

甘ったるいような、イカ臭いような、ぬるい雰囲気。間違いなくアイツと秀介がこの部屋でセックスをしていた。

怒りが爆発しそうになって、必死に抑えた。脳内の色々なモノが葛藤を繰り返す。このまま帰ろうか、数メートル先の秀介を一目みようか。でも秀介の顔を見たら、何もかも吐出してしまいそうだ。この理不尽な怒りだとか、俺の気持ちだとか、言っちゃいけない事さえ言ってしまうそうで。だけどそれでも見たかった。

じりじりとベッドに歩み寄る。

毛布にくるまった個体が目に映った。少しまるまって、肺が収縮を繰り返しているのが分かる。この2週間ちよっと、何回も会いたいと願った奴が目の前に居た。

クラッと、眩暈^{めまい}さえする。会えた事に嬉しくて、だけど事後の臭いが気持ち悪い。他人のセックスを、これ程までに気持ち悪いと思ったことはなかった。だって自分も同じ事をしているわけだ。

それをムカつくって事は、その理由は完全に秀介。本当に酷い奴ふと、髪の毛に触れた。寝る前に風呂に入ったのか、ほんの少しだけ湿った感じがする。それでも俺の指をするする避け流れる髪の毛。

欲の上に、どんどん欲が積み重なる。

髪の毛を梳^すいて今度は頭を撫でたいと思った。頭を撫でたら、今度は何をしたいと思うんだろうか。したくて溜まらないが、その先が恐ろしい。震えはしないけど。

ここで止めとこうか、ギリギリのところまでしてしまおうか。でにギリギリのところで秀介が起きてしまったら、それで本当にアウトになってしまう。

そんなハラハラする展開を好む俺は、本当に、人から好まれる性格では無いんだろうと、ここで自覚した。

いや、いいさ。別にいい。俺はコイツに好かれればそれでいいんだ。他の誰からにも好かれたって、コイツが俺を見て笑ってくれなきゃ仕方ない。

俺の性格を嫌うなら嫌え、ただ俺はコイツを――。

「ん……ジン……」

……。

は？

「……」

ふと1瞬だけ聞こえた声のような音は、ソレきりだった。空耳か、寝言か。出来れば空耳であって欲しいが、多分後者。

ジンって誰だ。アイツか。お前がセックスした奴か。お前、俺を目の前になに言ってるんだ。寝言でも許される事と許されない事が……。

寝言だから、そんな無意識状態に怒っても仕方ない。

それでも、俺の怒りの爆弾の着火線に、火がついた気がした。気持ちは火を消そうと焦っているが、火はどんどここちらに近づいてきて、そんでついに、爆発した。

「シュー」

「……ん」

「秀介。起きて、……起きろってば」

強引に、ゆっくりと力強く肩を揺さぶったと思う。寝ている癖に体温が冷たいのが意味分からなかったけど、そんなことにいちいち気を引いてられないそんな怒りの中。

秀介が、揺れる瞳の中に俺を映す。

「よお……早く起きて」

「……こ、いち……」

過去になんか

目の前で揺れるこの目が、大好きだったのに――。

部屋の電気をつけて、そのままずつと突っ立っていた。ベッドの上から顔を歪ませながら俺を見る秀介。それでも段々気持ちの整理でもついてきたんだろうか、じょじょに冷静な面持ちになっていく。「鍵、開いてたから勝手に入った」

何か喋らないとこの展開に飲み込まれていきそうだった。何せ怒りのまま、何も考えずに秀介を起こしたわけだから、何をして、何を言っているのかさえ分からない。

俺の理不尽な怒りをそのままぶつけるわけにもいかないし。

「不法侵入だぞ、帰れ」

とりあえず発した言葉は、あえなく粉碎された。秀介の眉がしかめられ、俺を見る。

「黙れ」

違う、俺はこんな会話をしにきたんじゃない。そもそも会話なんてしに来たわけじゃなくて、ただ顔を見にきただけで……なんで起こしちゃったんだ俺のアホ。

「さっき、キスしてたヤツと何してたの？」

あーあー。何言っちゃってんの俺。わかってるじゃん、分かりきってる事聞いて、最悪。

なんだってんだ。わからねえ。臭いのせいか、いや、それだけじゃない。何度も会いたいと思って、今、こうして顔をあわせているのに、何かぎこちなくて気持ち悪い。

違和感。

聞きたくもない質問をして、聞きたくも無い予想通りの返答を聞いて。

「交尾」

気持ち悪い。

「子なんか生産されねえだろーが」

子供の出来ないセックスして、嬉しいのか？ 出来ないって言う安心感か？ いや、それだけでそんな高いハードルクリアなんか出来ないだろ。

じゃあ、本当に。

「お前、ああいうのが好みなのか？」

アイツが好きで、だから……。俺よりも、アイツが。

「ああいうの？」

秀介の声に、ハツとした。この質問でもし、『うん』とか答えやがったら、俺は本当にこの先どうすればいいか分からない。さっきまでお前と向き合うために女と縁切ってたのに、それが台無しだ。秀介にも何するか分からない。

「男とセックスするのが趣味なのか？」

だから、少し質問修正をする。

もしコレでうん。って答えたら、なんて言おうか。じゃあ俺にしとけとか？ もしか問い詰める？ 好きな人としかしねえんじゃないかったつけ？ とか、お前人の事言えねえじゃん、とか。

肯定されたら俺の立場が優勢されるけど、否定されたらどうしよう。そしたら本当に、秀介はアイツが好きだからセックスしてるって事になる。

やっぱり、答え次第で、俺は地獄に落ちてしまう。

肯定しろ、肯定しろ、肯定しろ肯定しろ肯定しろ肯定し――。

「うん」

求めていた言葉に、何故か傷ついた。

「……」

「そうだよ、男とすんのが趣味なんだよ。お前には分からないんだろつけどさあ……。結構良いモンだよ？」

俺よりも軽々そうにそう言いやがった。笑いやがった。そんなに何だ、何なんだその目。なんでそんなに悲しそうに俺を見てんだ。

行動と言動が一致してねえよ。悲しいのは俺だ。

「……っ！ てめえ、気持ち悪いよ」

それからすぐに、自分の手のひらに、ピリっと言う、それ以上の刺激がした。部屋中に乾いた音が響いて、秀介が頬を押さえて俯いている。無意識のうちに、秀介をビンタしたんだと気づく。そんな資格、俺にはないって事くらい分かってるけれど。

——俺の前でそんな顔すんな。そんな事言うな。気持ち悪い。お前、そんな俺みたいなことするような奴じゃなかっただろ。何がしたい、何が言いたい。

「帰ってくんねえかな？ 気持ち悪いんならもう会いたくないだろ。てか、もう会わなくていいしさ、……な？」

会いたくないとか、会わなくていいとか。……俺はそんなこと、一度も言ったことも思ったこともねえよ馬鹿。決め付けんな、お前とは違う。

「帰らねえ」

ここで帰ったら、全てが無くなってしまふ気がした。

「なんっ……で……」

過去も思い出も、今まで幼馴染として、親友として過ごしてきた10数年が、全て無くなる気がした。でもそれは嫌で、だから、終わりになんかしねえ。

「帰らない」

過去になんか、なつてやるものか。

と言うか、少しだけ

寢床を貸せと言ったら、少し黙ってからベッドから起き上がり、立ち上がってから俺を見た。ここに寝る。みたいな感じに取れたから、そのまま、まだ温かさの残りまくるベッドに体を埋めた。

「気持ち悪いのに、何で帰ってくんねえの？」

「気持ち悪いから、帰んねえの」

壁の方に顔を向けながら、そう答えた。

我ながら凄じ意味の分からん返答をしたと思う。でも本当の事だししょうがない。それから何も言えず、何も言われず、ただ無言状態のままだった。後ろに微かだけど秀介の存在を感じて、胃がムカムカした。後ろを向きたいが、何か向けない。そんな気まずさが漂う空気。

背後で秀介が動きだして、ゆっくりと部屋から出て行った時には、思わず追いかけたという衝動にかられた。

後ろを振り向き、ドアを睨む。

服の擦れる音と、階段を降りる音が次第に小さくなっていく。それを聞きながら、俺はこの数分、数十分に溜まるだけ溜め込んだ後悔を吐き出した。

うわー、何やってんの俺めっちゃくちや馬鹿じゃんアホじゃん何してんだ馬鹿ていうか今ので秀介に完全にドン引きされたっつーかなんつーか……さっきのシュウとキスしやがってたアイツより俺今自分にムカついてるしこれからどうすればいいんだよつうかいつもみたいに顔見てえー声聞きてえー喋りてえーでもシュウにとって今俺は気まずい対象以外の何者でも無いっていうかなんていうかそのどつえばいいかわかんないんだけど――。

泣きてえ。

コレが世間で俗に言う、恋愛感情と言うものならば、俺は今すぐにでもそれをやめたいと思った。

こんな事考えるなんて今までなかった。シュウが女と付き合った時だって、俺が寝取ってそれで終了だったから、シュウはずっと俺の傍にいた。それで余裕じゃん、なんて心の中でガッツポーズしてたりした。そういえばその時のシュウは、本当に死にそうな顔をしてたけど、……もしかして、こんな感じだったリ。

「……最悪。」

下唇を噛み締めた。

あー、いや、……でもそのおかげでもう彼女作らなかったのかもしれないし、それなら別にいいような気も……。

「……」

別に良いことも無えよ。いつまでもこういう事を言っているからシュウも離れて行こうとしたんだろうか？

胸が痛い。今頃良心でも痛んで居るのか、もっと別な理由があるのか。

「……寝る」

分からなかったから、1回寝る。

夕方から走り回っていて、疲れてんだ。明日、ちゃんとゆっくり、シュウと話そう。話せば……ゆっくり話したらきつと。俺が思っていることも、シュウが思っていることも、分かってくれるし、分かっているやれるだろう。

そう考えながら、目を閉じる。

体を埋めたベッド何もかもにシュウの匂いがして、心地良くて、安心した。

*

「……うん……」

あれ？

「……」

夢の中で薄っすらと、快楽を伴った気がした。いや、気がしたじやなくて、現在進行形。それじゃあエロい夢でも見ているのかと言うと、そんな夢なんか見てはいない。

ていうかそもそも夢なんか見ていなくて、俺はもう不思議でしよ
うがないわけだ。

それでも寝ている脳で物事考えるなんて言う方がおかしくて、俺
はその快樂に気持ち良く浸っていたわけなんですが。

「……つきろ。こ、……ち……あ。起きろ……」

夢なんか見ていない。まぶた瞼を閉じたその先には真っ暗な空間が広が
っているだけなのに、声が聞こえた。……夢を見ていないのに聞こ
えたのなら、コレは幻聴？

「こ、いちっ……てばっ、うぐ……」

次第にちゃんと聞こえるようになってきたそれは、妙に辛そうな
声をしていた。起きろ起きろと何度も言われている気がする。……
だけど瞼は重いから、それは無理な相談。

でも何か、シュウに似てる声だなー。とか思ったら、一気に下半
身からの気持ち良さが増した気がした。

それで俺は自分が気持ち悪いと再認識して、心の中で見知らぬ誰
かに謝る。

「つきてくれ、なきや、困るよ、……っ」

シュウの泣きそうな声が聞こえて、コレはちゃんと返事してやら
なきやな。なんて、幻聴に優しさを持ってみた。

「ん」

自分の声から全身に伝わる音の振動。……それと同時に駆け巡る、
覚えのある快樂があった。覚醒しかける脳に、その気持ち良さ。本
当の本当に不思議に思っ、少しだけ目を開いて見る。

「……ん？」

真っ暗だった。

それでも何か、下半身に人一人分の重みがある。視界が見えない
分の他の四感が周囲を探る。まさかと思っただ、女より硬い感触。

呻き声にも似た苦しそうな悲鳴みたいな声が聞こえる。

まさかと思うけど。

「なっ。……なに、してんだよ……？」

いや、まさかとは思っけど――。

「何、してると思う……？」

上から、シュウみたいな声が聞こえた。

ベッドのシーツも枕も、部屋そのものにシュウの匂いがして、気持ち良くて、絶望したと言うか。後悔したと言うか、少しだけ泣いた。

ストーカーみたい

嬉しいような、悲しいような。嬉しかったような、……辛そうな気がしたり。この状況は、…何と言えればいいんだろうか？ ……抱かされたと言うか、…抱いたと言うか。

「……夜這い？」

ああ、夜這いされた。シユウに夜這いされた。だから嬉しいような、意味が分からなかったり。アイツは……俺が嫌いなのか、それとも、好きなのか。俺の思考はグチャグチャに迷宮入りしてしまった。セックスするほど好きならそれでいい。むしろ嬉しいし、ありがたい。だけど、……アレは何だったんだろうか。

「謝られた、よな」

ごめんと言われた。それで、久しぶりに『コウ』って呼ばれて、キスもされた。

泣きながら。

いきなりの事で、視界は閉ざしたままだった。顔は伺えなかったけど、キスをした時に、自分の頬が濡れた。名前呼ばれて謝られて、そんな時を思い出せば涙声だったかもしれない。

「何がしたいんだよ……」

セックスが終わった後に、数秒だけ沈黙があった。目覚めからの気持ち良さに浸っている俺が息を整え、声をかけてみたところで、シユウの体がビクつと一瞬震えて、それからすぐにシユウが部屋から出て行くこうとするのが分かった。

状況收拾もつかず、とりあえず追いかけようと起き上がる。行為中の微妙な揺れで縛りが緩くなっていたんだろうか。俺を目隠ししていたネクタイが首に垂れ下がる。

暗闇になれない中、感じ取れた事は、下半身はパンツもズボンもずり下がっていて、スースーするって事くらいだった。早く着直してシユウを追いかけてようとしても、今度は腕がガチガチにテープで

纏められている事に気付く。まあでも、手の付け根だけをテープिंगされているだけで、なんとかズボンに着れたモノの、とつくにシユウの気配はなくなっていた。

舌打ちをして、とりあえず……と、部屋の明かりをつけてみる。

「変わんねー」

相変わらず、必要の無い物は置いていない。殺風景なんて言葉は出ないけれど、妙に大人っぽくて、いつも少しだけム力ついていた。外に出ようとしても、こんな深夜でも、縛られた腕で住宅街を歩いていたら、それはそれで不審者だろうと思い、俺はこの家に居るしかない。シユウの母さんは、そういえばこないだ旅行に行くと言った。今は居なくてありがたいが、もしこのままシユウが来ないで母さんが帰ってきたら、それはなんて最悪な状態なんだろうか。

シユウの母さんからすれば、息子の部屋で息子の友達が腕を縛られているっていう、なんか、……おかしい感じになるわけで……。

多分シユウもそれくらい考えるだろうし、シユウも嫌だろうし、このまま待つて居ればシユウが現れると予測し、とりあえずそれまでくつろぐ事にした。

「……あつ」

ふいに視線を浮かせた先に見えたシユウの机の上に、俺のじゃない携帯を見つけた。財布も隣接していたが、俺の目に映ったのは携帯の方だった。見たまんまの、シユウの物。

携帯番号とメールアドレスを変更して、……そのまま俺には何の連絡もなく。通信手段も途絶え、他の奴等に聞いても『シユウが教えんかって言ってる』の一点張りで教えてももらえず。

ここぞとばかりに携帯へ近寄った。この機会を逃せば次はいつ連絡手段を見つければいいか分からない。縛られた腕をシユウの携帯に忍ばせ、少しだけ悪い笑みを浮かべた。

「暗証番号……」

自分の誕生日か、ぞろ目数字か、順列か。シユウが設定する暗証

番号なんてそんなものと分かっているのは、幼馴染として長年一緒にいたからなんだろう。

「ビンゴ」

自分の誕生日。人の携帯の暗証番号を1発で開いてしまう俺って結構凄いとか、……思ったり思わなかったり。出てきたアドレスを自分の携帯に登録していく。手を縛られていて、中々スムーズには進まなかったが、ちゃんと保存までした。

保存までしたところで、俺は本当にストーカーみたいだな、と溜め息をつき、番号をきつちりと登録したのをもう一回確認して、ベッドに座り込んだ。

「逃げられると思うなよ……」

そんな事を口にしてみたとき。ふと、下の階からガチャリと音がしたのが気がした。心臓がドクリと跳ねて、耳が神経を研ぎ澄ます。ギシギシと階段を上がる音がした。シュウが戻ってきたんだろうか。じゃあ今からちゃんと話し合おう。分かりあって、仲直りして――。

ゆっくりと部屋のドアが開いていく。最初の数センチはシュウの姿しか期待してなくて、開き始めて数十センチ開いた当たりで、あれ？ ……なんて不思議に思ってみる。

「……」

シュウより背丈があって、シュウより男らしい顔つきをしていてコイツは、シュウとキスしていた男……？

足と顔と、胸辺り

「あのさー……」

「……」

「そんな睨まないで、…照れる」

目の前のソイツが場の空気も読まないでそんな事を言ったので、足を軽く一蹴りしてやった。本当は思い切り殴ってもやりたいが、殴る理由は自分勝手すぎたので、止めといた。

「絃一君でいーんだよな？ 俺、秀介のお友達の仁志ってんだけど。ジンにココロザすって書いて仁志。ま、秀介がジンって呼んでるしお前もそう呼んでよ」

開いた扉の前に、目が合って一瞬だけ顔を引きつらせたコイツが、そう言った。高校の同級生が先輩か。俺の知らなかった秀介の、お友達。『お友達』にも健全な者と不健全な者があるってことくらいすつげえよく知っている。

コイツの言った秀介のお友達ってのは、完全に後者なんだろう。

そんな事を思っ、また足を蹴りたい衝動に駆られた。

「殴りてえ……」

「え、……俺マジでテープ切らなくていい？」

秀介の机のどこかにあったカッターを使って、俺の手にグルグルにテーピングされたテープを切りながら、仁志……ジンがそんな事を言う。別にそんなんでキレるような短気な性格ではないが、足を蹴ってやった。理由は勿論ム力つくから。

「堅ってえなーコレ。カチカチすぎ。秀介君は以外に器用だね」

「……」

そうだ、そういえばコイツ。なんでここに来てんだろうか……て、そんな答えなんか一つしかないじゃねえか。シュウがジンをここに来させただけだ。じゃないとこんなタイミングで来るような人間なんかいないし。

じゃあ、ジンを寄こしたその張本人は今どこにいるのか。

「え？ 秀介？ 俺ん家」

笑顔でそう言ったちようどその時に、カッターがいい感じにテープを切り終わった。離ればなれ、自由になったその右手が拳を握り、思い切り仁の顔面目掛けて振り下ろされる。理由は勿論、今まで溜めた我慢の限界。

「おわっ……？！ と、あつぶねえ！ え、何？ 何？ 覚醒っ？！」

反射神経は超絶良いらしく、ちようど左頬を掠める程度で、仁は俺のその右手を避けた。尻餅を付き、目を見開きながら何やら中学生みたいな反応。いや……こんな場合でも冗談噛ますくらいの余裕はあるって事だ。ある意味大人な反応かもしれない。

「何も言わなくていいから、お前ん家連れてけ」

「何か言っていたいお年頃だから、ヤダ」

言い方がム力ついて、教えないって事にム力ついて、だからシユウに会えないって結論にム力ついて、俺はそのム力つきを目の前のコイツで発散しようとした。

「言えつつの！」

右手をグーにして、振り下ろす。そうすれば、ギリギリのところ仁がそれを避けた。俺のグーが中々当たらないのでストレスも増して、俺はもう理性さえ失っていたと思う。

この状況はヤバイと思ったのか、もう一度殴ろうとした俺を突き飛ばし、仁は部屋の出口に向かって走りだし、思いきり扉を閉めた。俺はツーテンポくらい遅れてから扉を開き、仁の背中を追う。

階段を下りてる頃に家の扉がガチャンと閉まる音がして、急いで外に出た。見つけた背中中はもう50メートルは先を行っていて、コンクリートを裸足で必死に駆けている。それなら俺も靴を履いている暇もなく、裸足で仁を必死に追った。

「待てこのヤロっ！ テメエ！」

近所迷惑なんて言葉は知らない。

「逃げてゐる奴が待てつつつて止まるかつ！」

正論を言いながら俺との差をどんどん開けて行くソイツはまだまだ余裕そうだった。ていうか、自分がこんなに持久力が無いとは思つてなくて、自分でもビックリした。

少し走っただけで、息はもう切れ切れ、足には乳酸が溜まりまくつて、重くておかしい感覚がした。

「待て！ 待っ！ ……あでっ！ ぐっ、……痛う！」

最後は、その感覚に耐え切れなくなった足がバランスを崩し、顔面からコンクリートに叩きつけられて終わった。衝撃的な痛さに鼻を抑える。

ゼーゼーと大げさな過呼吸を繰り返しながら、急速に小さくなつていく仁の背中に舌打ちした。

「……痛え」

足と顔と、胸辺り。

鼻をおさえた手を見みると、ベツタリと血が付いていて、それが鼻血と言う事をすぐに知った。その鼻血が両鼻から出てきているって事は、シュウの家に戻ってから知った。

そんなナルシスト

好きって思った事は何度もあるけど、好きって言った事は一度も無い。理由は、関係の崩壊を防ぐ為と、遠いけど近い存在であり続けたかったから。女が出来れば寝取ればいい。アイツの隣には俺が居ればいい。本気でキレても良いような事をしても、怒る様子の一つも見せなかった。だから思いあがってたのかもしれない。

完全に避けられ始めて、焦った。それで男とキスしているときは、怒りが頂点に達した。俺の寝取れる範囲外。

範囲内は、女とシュウ。ただそれだけ。

「いてえ……」

コンクリートに思つくそ顔面強打したのなんか初めてだ。……てか、こんなイケメンに何て事してくれてんだ。いや、自分で転んだんだから仁は悪くないんだが。

ナルシストっぷりを発揮しながら悪態をついたり。もう今日はシュウは来ないだろうと理解した家へもう一度戻り、とりあえず鼻血を止めていた。こんな顔で家まで帰れるわけないし、家に帰ってからもっと大変なことがある。

シュウの前に、今一番怖いのは母親だ。飯も食わずに飛び出して、連絡一本入れてない。それで今は日付が明けて深夜だ。どれ程の怒り爆弾を投下されるか分からない。

「……こえー」

それでも帰らないわけにはいかないし、明日も学校があるので、サラッと怒られて早々に寝て起きて学校へ逃げようと、シュウの家を出た。

「あー……鍵」

人の家に鍵をかけないで出て大丈夫なんだろうか……。でもここには鍵はないし。帰ってくるまで待つてろって言われても、無理な話だ。……しょうがないから、鍵をかけずに出る。こんな平和

な住宅街で空き巣に入られる確立なんて少ないと思うし、大丈夫だろう。お邪魔しましたと言口にし、家の扉を閉めて歩きだした。道は暗くて、涼しくて。さっき掻いた汗がシャツに染み込んでいて、風が吹くと少しだけ寒かった。

ふと思いつき、ポケットから携帯を取り出す。そういえば、家に戻って机の上を見ると、あった筈のシユウの携帯も財布も無かった。もしかしてジンが持っていたのか、……ていうかそれを取りに來ただけなんじゃないだろうか。確かに思い返してみれば走ってるとき、ジンの手の中に財布と携帯があったかもしれない。

電話帳から出したアドレスは先ほど登録したシユウの物で、メールだと返されないと思い、電話番号をクリックした。

10コール鳴らしても電話には出なく、俺だから出ないのか、それとももう寝ているのか。どちらにせよ自重する気もないので、何回も何回もかけまくった。家につくまでに何回かけたかも分からない。多分10回か15回くらい。俺の携帯には新着メールも着信も10件くらい溜まつてるのは普通だし、……まあ良いだろう。

いつのまにか、目の先には自分の家がそびえ立っている。

「絃一つ！ どこ行つてたの、この馬鹿っ！」

「ちよっ……！ ご、ごめつ。ごめんなさいって！」

出来るだけ静かに明けた扉の微かな音を聴きつけて訪れた母は、本当に鬼みたいだった。新聞丸めて何回も叩いてくるし、何を見たのか尻も叩いてきて、自分の部屋に鍵をかけて逃げ切るのはいいけれど、5分間くらいドアをどんどん叩かれ続けたのにはさすがに参った。なんのホラーだよ。

向こうが静まったのを確認出来るようになって、ベッドに仰向けになる。携帯を取り出し、それからもう1回、2回。

寝落ちするまでに何回したのかは、正直覚えていなかった。

「んー……」

目が覚めたのは朝10時くらいの時間だった。学校じゃ既に1時限目も終わっている時間帯。でも特に急ぐ素振りも見せずにノロノ

口と制服へと着替えた。

母親は部屋に鍵が掛かっていて起きるまで起こせなかったらしい。最初こそまた新聞丸めて叩いて来ていたが、呆れたのかも言う何もないわなくなっていた。

顔洗って飯食って歯磨いて、準備万端になってからノロノロと家を出る。家を出てから少し歩いたところで、携帯を取り出した。充電が満タンになっていないのを目に写しながら、リダイヤルでシュウの携帯に連絡を入れる。

結局さつきは1度も電話にでなかった。出るか出ないかは分からないが、やらないよりは価値がある。こんな事を続けていけば俺は本当のストーカー変態になりかねないが、……この顔なら世間様は許してくれるだろう。そんなナルシストな自信が身に纏っていた。

1回、2回、3回、4回……プルルとお決まりの効果音が流れ、これも出ないかと思い始めたとき。ふいに回線と回線とが繋がる音がして、体がビクッと震えた。

「……もしもし」

何かイラ付いてそうな声色。いや……完全にイラついてる。その声の主は完全にシュウで、電話に出たことに、自分でも少しだけ驚いた。

はははははは（前書き）

最近サブタイトルをいかに意味不明にするか考えるのが楽しすぎる。
お気づきでしょうがサブタイトルは全部その話しの文中から。考
える手間が省けて結構楽ですね

絃一が次第に変態ナルシストになっていくのはみゅうじん。が面白
がってるだけです。

ははははは

「……ねえ、早く。そこ、今どこいんのって聞いてんだけど。……あ、つうか、戻ってくるかと思って待ってたら、案の定あいつ呼びやがってさあ……」

愚痴といふかなんというか、そんなような事を一人で喋っていた。声を聞きたいがシュウは何も言わないし、返答を待って無言になったら通話を切られると思ったから。とりあえず、何回も何十回もしまくってやつと繋がったこの回線を切られたくはなかった。

ナルシスト思考全開にしたり母親に怒られたりしていたが、こっちも必死なのだ。

「なあ、シュウってば……」

何度目かの呼びかけにも何も答えず無口なままのシュウに苛立ちはしたが、電話を切らずにいてくれていた事が何より嬉しかった。

そんな些細な事を嬉しがっていた時だった。

「……違うだろ」

「は？ 何が……」

シュウの発した言葉は、予想外で、意味不明で、理解しがたい言葉だった。一体何が違うのか、何に向けた言葉なのか、ただ疑問だけが募っていく。

「おい、何が違うって……？」

何が違うのか。主語がただ聞こえなかっただけかもしれない。この意味の分からん疑問を解決しないと、話を次には進めないだろうし、ただストレスが溜まるだけ。

「幼馴染なんかやめる」

本当に意味が分からなかった。意味が分からないしストレスは溜まるし、そろそろ本当に頭が痛くなってきた。眩暈がしてそこら辺の電柱に頭を預けてみる。それでも電話は耳から外さず、シュウの言葉を待っている。

待っている間に汚い野良犬が足元に寄ってきて、俺のいる電柱足元にしょんべんしようとしたから、その野良犬をジッと睨んでやると、逆に威嚇された。吠えてうるさいし噛み付かれたりそのまま足元にしょんべんかけられるのは本当に怖くて恐ろしい事なので、もう1個先の電柱まで進んでそこに寄りかかった。

「幼馴染なんかやめる」

犬の威嚇に負けて、次はこれだ。

「はあ？　ちよつ、シュウ。お前ホント何言つて……」

「知り合いつても元クラスメートつても、全部やめる」

コイツは本当に、ただ俺を絶望させれば気が済むんだ。ただ地獄を見せれば良いんだ。

幼馴染をやめて、知り合いもクラスメートだったつてもやめて完全な他人になるって？　出来るわけないだろう。そんな簡単にやめられる存在じゃねえだろ俺達は。お前にとつて俺はそんな程度の存在か？　こんなに俺をイラつかせた癖に。俺を夜這いした癖に。「なあ……。今さ、……ドコいるの？　教えてよ。会って話し、しようよ。な？」

「一生会いたくない」

その言葉がただ俺の胸にグサッと突き刺さった事か。悲しいぜ？　苦しいぜ？　痛いぜ？　それで屈辱的だ。こんな顔の良い男に一生会いたくないだなんて、誰にも言われた事ない言葉だ。そこで、お前には一生言われたくなかった言葉だ。

「シュウ、そんなに俺の事嫌い？」

震えた声で、聞いてみた。

「嫌いだよ」

はつきりと返されて、目の前が真っ黒になった。

「嫌いなんだ」

2度目の嫌いで、目の前が真っ白になる。心が抜けかけていたかもしれない。魂が落ちかけていたかもしれない。それでも、俺は最後の力を振り絞って抵抗してみる。

「俺は嫌だぞ！ 切るなよ！ 切ったら一生お前に纏わりついてやるっ！」

「……」

「ふざけんなっ！ おいシュウっ！ しゅっ……」

俺の抵抗はまだ続いていたのに。言葉の途中で切れた電話向こうの回線。ツーツーツー音を立てて、俺の耳に響き渡った。

「切ったな」

……切った、切りやがった。切ったらどうするか、俺は今まさにシュウに忠告した。

「……一生纏わりついてやる」

はははははは。ざまあみろ。

乱暴に携帯を閉じ、抑えきれず零れ落ちまくった笑い声に、後ろの野良犬もドン引きしていたのかもしれない。ワンワンと3、4回程吠えて、それから俺の目の前を全力疾走で通過していった。

今のところの人生、最大に後悔

11時くらいに学校の校舎に入った。

教室に行く前に職員室によって遅刻届を書き、確認が必要な先生に判子を押してもらってから教室に足を踏み入れた。教室内は正に授業中で、少し入る気が引けたが、いつ出席単位がなくなっても可笑しくない状態なので、構わず入った。教卓の上にいる世界史の教師は俺を人目見ると『おはよう』と言ってから笑った。その挨拶を軽く返し、遅刻届を渡して自分の席に移る。

「はよ、お前女と手え切ってたって？」

カバンを机脇にかけたところで、後ろの席の友人が俺に話しかけてきた。内容は一切コイツには話してない事で、片眉が引きあがる。

「あ？　なんで知ってたんだよ」

「ミホが言ってた。え、マジかよ？　マジん好きな奴でも出来たのか？」

口から出てきた名前は、紛れもなく俺のセフレ……いや、もう関係は切り終わったから元セフレだ。ミホは俺と同じで、俺をセフレとは思ってなかった。スパッと切れてくれたし、……まあ、面白がつて話を広めていたんだろう。

「あー……そんな感じ」

過去を清算するといふかなんと言うか。そんな風に呟くと、柄にも無い事してるな、と、笑われた。そう言われて見れば、本当に柄にも無い事をしまくっている。鼻血出して、ストーカーみたいな事をして、キャラは崩れまくっている。だから、この先どんな柄にも無い事をやってももう大丈夫。だってもう崩れてしまっているから。

後はまっ逆さまに落ちるだけだった。

*

『おかけになった番号は、現在電波の届かないところにあるか、電

源が入っていないため、かかりません』

授業の合間合間に電話をかけた。滑舌の良すぎるこの女の声は、本日3度目だ。昼休み時間。学校登校中に寄ったコンビニで買ったパン2、3個をバクバクと食っていた。

「電源、切ったな」

さっきまでは電源もつけっぱだったが、さっきから電源が切れている。全面的に俺と話したくないらしい。ただ……電話を切ったって家に行けば居留守使われたっていつかは会える。本人は会いたくないし他人になりたいらしいけど、俺は会いたいしなりたくないし。わざわざシウウの言い分を聞いてやる事も無い。ていうか、電話切ったら一生付き纏ってやるって言った瞬間に切れたんだ。それはつまり、一生付き纏っても良いって事になるじゃんか。

だから付き纏う。それが答え。

「……はあ……」

シウウ相手だと前途多難すぎて、溜め息が漏れた。

それから、下校時間まで授業と授業の合間にシウウの携帯に電話をかけた。こうもきっぱりと『かかりません』と言われると、本当にガンと頭に岩をぶつけられたような気分になる。……まあ、曖昧に答えられるとそれはそれで苛付くんだろうけど。

「てかそれで苛付くのは俺だけじゃねーな」

下校中に2、3回。その度に滑舌の良い女の声。永遠にループしそうで、少しだけ怖くなった。まあでも、そんな怖さも別の恐怖にかき消されるわけだ。

「絃一、携帯」

家の玄関に入って早々、靴を脱ぐ暇もなく母さんが居間から出てきてそう言った。

「携帯？ ……はい」

何の迷いも無く携帯を手渡したことに、今のところの人生、最大に後悔した。

「没収」

ドン引きしてしまった

携帯を没収された。シウウの家にに行けばいなかった筈のシウウの母さんがいて、シウウは居留守とかじゃなく本当に居ないらしい。仁の家に居るってことは分かっている。けどその仁の家がどこにあるのかが分からない。携帯没収されて連絡は取れないし、家にシウウはいないし。最悪な状況だ。

「携帯返せよー……」

何回も繰り返した言葉は気力さえなくなつて途絶え途絶え。それを言われている母さんは『ウザイ』『勉強しろ』などと、……携帯を返してくれる素振りには1個も無い。

「大体、あんたちよつと行儀悪いよ?! 成績だつて下がってんじやないのっ?!」

そりゃあ女とセックスばっかりしてるんだから成績は下がってんだろう、……保健体育はしらないが。

「来期から頑張るからっ。だから携帯返せつて!」

「今期から頑張れない子が来期から頑張るなんて無理でしょうが! 勉強しなさい!」

もうすぐ期末でしょ、と頭を叩かれる。

「母ちゃーん……」

正論言われまくりで、俺の言い分は絶対に通らないんだろうが、俺はずつと携帯返せと連呼していた。飯の時間になつても、父さんが帰ってきてても、ずつと連呼していた。

「……あんたほんといい加減にしなさいっ! ずつと言ってる気力あるんなら少しでも勉強時間に当てなさい!」

またまた正論を言われた。

「携帯返してくれたらっ……」

叩かれた。

今日何発目かの攻撃は俺の頭をズキズキと痛ませる。こんなんで

出来る勉強も出来ないだろうと、そう口に出そうとしたけど止めといた。このまま連呼していても叩かれて寿命を縮めるだけなので、今日のところは諦めて部屋に戻った。

勉強すれば返してくれるのかと、参考書を手にしようとしたが、面倒臭いので止めベッドに寝転がった。面倒臭いのもあったけれど、今勉強しても勉強にならないだろうと思ったのが本音。ていうかそもそも、期末までまだ全然時間はある。1、2週間前から勉強始めれば大方平均点以上の点数は取れるだろう。そこでちゃんとやれば母さんが心配するようなことにはならない。

だから携帯を返して欲しい。

そんな願いも虚しく、土曜日を過ぎても携帯は返してもらえなかった。

*

それから、日曜日の午後。

「没収期間終了。」

ふて腐れたように頬杖をつきながら、ソファに座りTVを見ている俺に向かって、母さんがそんな事を言った。にゅっと上から延びてきた手の中から落ちてきた携帯は、俺の太ももの間に落ちる。用事が済んだからか、それだけ言って去ってしまった母さんの背中を少しだけ見つめていた。

没収された間に何処か変なところを弄られてないか確認してみるのが、特に変わったところはない。メールとか電話帳はまあ別に見られても良いけれど、リダイヤルの『シュウ』の文字の多さは、見られたらマズイかもしれない。

見たか聞こうにも聞けないし、……いや、あの素っ気無さはこれを見てしまっただけでドン引きしてしまったからかもしれない。

最悪、かも。遅いが、一応リダイヤルを全削除しておく。削除する前に、久しぶりにもう1回シュウに電話した。勿論本人ではなく、あの女の声が聞こえてきた。

予想通りで少しだけガツクリした。

まあ、明日からは学校がある。アイツも学校には行くだろうし、待ち伏せでもなんなりしてれば会えるわけで。

俺は焦る心を落ち着かせて部屋へと戻っていった。

校舎前で仁王立ち

次かけたシユウの電話音に、女の声はしなかった。

「絃一、晩御飯だからはやく降りてこいー」

部屋に入ってから、俺も俺なりに母さんに迷惑かけたと思い少しばかりの勉強に勤しんだ。30分か20分か……もしかしたらそれより下かもしれないが。眠気に逆らう事は出来ない体質だ。次に目を覚ましたときは母さんが飯を作り終わって俺を呼ぶ声。勉強一つで起きた眠気に5、6時間も寝ていたらしい。……この俺の睡眠欲は本当に病気なんじゃないかといつも不安になった。

いつまでも降りてこないと母さんがキレるので、怒られる前に自分の部屋を降りた。階段で携帯を開き、電話帳からシユウの番号に電話をかける。

また女の声だろうな、と溜め息を漏らした。

「……ん」

ツーツーツー。

「ん……んん？」

ツーツーツーツーツー……。

ツーのエンドレス。いつまでも止まない。勿論女の声はしない。

ツーツーと効果音が耳に入ってくるだけで、俺は居間のまん前で携帯片手に立ち止まってしまった。

「何やってんのあんた、早く飯食べなさい？」

「母さん……電話かけた瞬間にツーツーって……なんで？」

「そりゃ、あんた……。私にわかるワケないでしょ」

知ってる。いや、知ってる。このツーツーの意味も。母さんが機械音痴だつて事も知ってる。何で聞いたのかって、……ツーツーの意味を信じたくなかったから。

「ちやくしんきょ……」

着信拒否された。しやがった。俺が頑張って勉強して、……眠って

た間に着信拒否しやがった。

「アイツっ……」

ムカムカして、力に手が入る。手の中にある携帯がミシミシ音を立てた。

「こおら、ムカついてなくていいからさっさとご飯食べる！」

「……はい」

また携帯を取られるかもと、もしかしたら金さえ取られてしまいそう、それに何より怖い。椅子に座り、醤油を手に取り魚と冷やつこに振りかけた。

「……いただきます」

飯を食ってそれから、またシュウの家に行ってみようか。……でもまだ居ないかもしれない。それに居ても絶対、居留守を使われる。夜這いされて、電話に出てくれなくて、電話に出たと思ったら幼馴染を止め、知り合いという事さえも止めると言われて。それで電源を切られ、最後に着信拒否と来た。ここまで来れば、家ではもう徹底して俺を家には入れないだろう。

どうすりゃいいんだ……。

「あ、紘一明日さ——」

このままストーリーカーじみた事をしてるといつか本当に警察に突き出されそうだが、俺はシュウと対で喋るまでは絶対に諦めねえ。

だからやっぱ、……シュウの学校で張るか家で張るか……。

「ちよつと、あんた聞いてんの？」

「ん、聞いてた聞いてた、分かった」

「そ、じゃいいわ。よろしくね」

「おう」

この住宅街からシュウの学校までの距離は、俺の通う学校より遙かに遠い。15分くらいバスに乗って、それから電車で揺らり揺られて、それから数十分くらい歩いてやっと見えてくる。俺の高校は徒歩ですぐに付く。しかもシュウの学校と俺の学校は正反対の位置。なんでそんな高校を選んだのか、前までの俺には謎だったが、最

近になってやっと分かった。俺と離れたかったらしい。

それならそうと、面と向かって俺に言えればいい。離れると言われて離れはしないし、それに一生付き纏うってついこの間に決めたわけだ。

まあ話しくらいは存分に聞いてやろうと、俺は偉っそうにシユウの高校の校舎前で仁王立ちしている。

その日曜日の次の日の、月曜日の事だった。

逃がさねえ

案内パンフレットや学校紹介本でしか見た事の無いその学校を、初めて見た。思いのほか大きく、何気に自分の通う学校より立派で、シユウや仁や、その他ここに通う奴等を少しばかり羨ましく思った。まあ、そんな思いも『男子校』の単語でかき消されたが。

俺はその日、学校を多いに遅刻した癖に、昼の最後の授業を抜けて早退した。担任にはしこたま怒られたし、多分家にも連絡は来るんだろうが……まあ、今家には誰もいないから大丈夫だろう。

家にも帰らず、学校を早退してそのままバスに乗り電車に乗って、シユウの学校まで来た。場所は知らなかったから、無駄にそういう類の事に詳しいヤツに聞いた。別に方向音痴ってワケでも無いから、随分あっさりついた。結構迷うと思って少し早く出てみたが……逆に早く付きすぎて待つ間は少しだけつまらなかった。

来る時に見つけた近くのコンビニで飲み物を買う。それからまた校舎前に戻り、膝を曲げたり、伸ばしたり。校舎門のコンクリートに寄りかかったり離れたり。うるちよろしたり。ずっと校舎前でシユウが出て来るのを待っていた。

ふいに開いた携帯に表示された時間はちょうど下校時間が始まる時間で、それに合わせて下校を知らせるチャイムが鳴るのも聞こえた。3、4分経った時、玄関先から数人出て来るのが見え、この分じゃもうすぐシユウも出て来るだろうと、気を引き締め直した。

男子校の前に、違う高校の制服を着た男子。これが女なら、もしかして古風にナンパでもされたんだろうか。何を思ってるか知らないが、結構な注目を浴びている気がする。黄色い声とか、そんなんとは程遠い、……睨み？のような視線。それに、先ほどから校舎を通り過ぎるヤツから『合コン』と言う言葉が数回聞こえてくる。その度に俺は少し笑ってしまいそうになったが、何とか耐えていた。何というか、……女がいない光景ってのは、本当にむさ苦しい。

シュウもジンも、よくこんなところに毎日毎日通えるなあ、なんて、少しばかりの関心を覚えた。

「つうか……おせえよ」

もう五分近くたっているのに、いまだシュウの姿は見えない。掃除してんのか、……もしかして部活かとも思ったが、あのシュウが部活になんて入るわけない。小学校の頃、誘ったサッカー少年団も見学体験して無理だと諦めた。中学の頃もずっと帰宅部だった。格別得意なモノもなく、唯一あるのは、平均より少し高い偏差値……ってところだろうか。

特徴が無いのが特徴。みたいな感じの普通な奴だ。アイツは。少し言い過ぎてる感もするけれど。まあ、それだからこそ俺の隣に居るのがイヤだって事も少しはあったのかもしれないが、そんな事はどうでもいい。これから、そんなこと考えられなくなるまで隣に居てやる。

だから安心して戻ってくればいいんだ。

それから少し経ち、その10分後のことだった。

校舎前で棒立ちするシュウに、俺は一言だけ声をかけた。隣にいるジンは少しだけ驚いた顔をして、何か納得したように顎に手を当てた。

一緒に学校から出てきて、またジンの家に行くつもりだったのかと思うと、少し以上に腹立ちを覚える。

「……シュウ」

「こつ……い、ち」

逃がさねえ。

それは一体、いつの事

日曜日明けの、月曜日のことだった。土日も合わせ、4、5日近くも休んだ学校は、少しばかり懐かしく感じられ、結構面倒臭く感じられた。それでも普通に登校し、久しぶりに友達とも会話をし、普通に授業を受け、まあ、いつも通りに学校生活を送っていた。

コンパでジンと知り合ってから、いつも帰りはジンと帰っていた。まだ1ヶ月も行っていない行動だけれど、体は迷わずにジンの教室へと向かっていた。

それに、今日は聞かなきゃいけない事もある。

『飽きた?』

階段から、ジンのいる1階下の2年生がズラッと勢ぞろいしている階に降りた。見覚えの無い人達や、同じ中学出身で、少しだけ顔を見知っている人とか、そろそろ廊下でたむろって居る人の体を避けながら、ジンの居る教室へと向かった。もうSHRも終わっているみたいで、教室のドアは前も後ろも開きっぱなしだった。近くのドア付近で少し立っていると、声をかけずともジンが俺に気付き近寄ってくる。

まあ、今日も相変わらずで。

「お、来た来た! なあ今日マツク寄ってかね? なーんか急に食いたくなつてさあ」

脈絡の無い話しかもいつもの事で、今日は最初に何を話してくるか、少しでも面白がつてる部分もあった。

「ああ、……新発売のやつ。昨日CM見たけど、美味しそうだったかも」

「え、何それ知らねえ!」

「明太マヨがどーのこーのって感じの……ああ、てか。それより聞きたい事があるんだけど」

こっちはハンバーガーの話をしたいわけじゃない。危うくジン

のペースに乗せられてこっちの話題を忘れるところだった……。

「聞きたいこと？ あ、ちよい待っててな、カバン持ってくるわ」

帰りながら話しよう、と、ジンは一旦自分のいつも座っている席の上に置いてあるカバンを取りに行った。戻ってくると、教室を出て、俺に笑顔で振り向く。

「っで、何？ 聞きたいこと」

階段を降りて、少し遅れて歩いている俺と並ぶようにまた歩きだした。

「俺、抱くの飽きた？」

簡潔にただそれだけ聞いてみた。ジンを見ずに歩いていて、ふいに横にいたジンの気配が止まったのに気付いた。振り向くと、ジンがきょとんとした顔で俺を見ている。

「え、どういう意味？」

「いや、そのままの意味なんだケド。飽きたかなー、みたいな」

「てか学校の中で何言ってるの」

「外歩きながら話すのも今とそう変わらないだろ……で、飽きた？ 結論を急ぐのは、今日はこのままジンの家に行くか、帰るか。…

…まあマックに行くかどうかは知らないけれど。ジンの家に行つて、そこでこの話をして『飽きた』なんて言われたら、いちいちジンの家まで来た意味が無くなってしまつから。

「なんで飽きたと思うの」

「土日、しなかっただろ。つるんでて脳内そればっかってイメージしか無かったから、そーかなーと」

「秀介君。……もっと良いイメージ持つてよ……。あー、でも。勘違いすんなよ？ 俺秀介君の事飽きたなんて思つてないから。……土日は…なんて言うか、気遣い？」

「？」

最後は良く分からなかったが、とにかく飽きられて無いって事は分かった。頭を撫でられ、もう慣れきってしまった事に、手で払う事もせず、ただまた前を向いて歩き出した。

「そーと決まったらマツクだな！」

「そっちは行くのな」

「当たり前。新発売食いてーし」

ジンと俺のこの関係はいつ終わるのかと、……もしかしたらまだまだ終わらない気がして、少しだけ不安になった。

『俺が紘一を諦められるまで』

それは一体、いつの事なのか。

「あ、俺今金無いから飲み物だけしか買えねえかも」

「奢ってもいいぞ？ 付けで」

「それ奢ってねえじゃん」

玄関に付き、靴箱を間に少し声を張り上げながら話しあった。靴を履き、玄関を出る。太陽が眩しくて、少しだけ目をしかめた。

ジンと同じくらいの歩幅であるきだした外は、さっきよりも暑くて、上から降り積もる太陽光の暑さが重かった。

「……シュウ」

校舎前。コンクリートで出来た門から出てきた、この学校とは全く違う制服を着た男は、真っ直ぐに俺を睨んでいた。

上から降り積もる太陽光の暑さが重みを増した。

「こっ……い、ち」

『俺が紘一を諦められるまで』

それは一体、いつの事なのか。

その本人が、その日をわざわざ引き伸ばして行く。

なんて酷い奴なんだ

「な、ななな……なん……」

視線が重てえ。

「……」

一度見た目は、一度も逸らす事が出来ない程鋭い。暑さが重たくて、視線も重たくて、俺はそこからピクリとも動けなくなってしまう。何故ここにいない筈のこいつがいるのか。わざわざ遠くの高校を選んで。こいつは結構面倒臭がりな面もあったから、絶対にここまで来ないと少しだけ確信さえもっていたのに。

この場合、何をされるのか。……ここで殴り殺されるのか。いや、学校の目の前でそれはヤバイの分かってると思うから、心配はいらないと思うけれど。夜這いされましたって公共面前で言っちゃうとか？ でもそれはこいつにも色々反動が……。

いや、冷静になれ俺。てか、それよりまず。ここからどうやって逃げるかだ。

とつさに考えた作戦は3つある。一つ目はジンを身代わりにここから全力疾走。二つ目はジンを連れてここから全力疾走。三つ目は学校に立て籠もる。……いや、三つ目はいつ出てきてもこいつが待ち伏せしてそうだから無しで。

二つ目の、ジンを連れて逃げるつてのは、あんまり意味は無いんじゃないだろうか。どうせ紘一を振り切ってマツクに寄つたとしても、飲み物しか買えないんだし。それに一人で逃げた方がいちいち相手を気にしなくてもいい。

固まる足にぐっと力を入れて、まだ少しばかり紘一と目を合わせたままだった。息を整えて、ふいを付いて逃げるようにその時を伺う。

紘一の足が地面の石を蹴る。石はコロコロ転がって、俺の足にコツンと当たった。

「逃げんなよ」

腕を掴まれ、少しでも手前に引つ張られた。

「な……」

逃げようと考えてたって事を知っていたのか。いや、大体察しは付くんだろうけど。ここは逃げさせる場面なんじゃないだろうか。てかほんと、……逃げさせてください。

「放せ。俺コレからジンとマツク」

目を逸らし、それだけ言った。暑過ぎて、汗が頬を伝った。そのまま流れ、顎からポタリと落ちて言った。

「アイツと話すより、俺との話の方が大事だ」

「決めつけんな。俺は……」

「逃げたら夜這いされました発言しちゃうから」

「だから……それじゃお前にも……」

「シユウと話せないんなら別にそれでもいい」

耳は一言一句漏らさずにその言葉を受け止めていた。前も言っただじゃんかよ。そんな事言ったら、勘違いされるんだって。勘違いしたソイツは傷つくんだって。

なんて酷い奴なんだ。

「そーいう事なら、俺帰るなあ」

俺の後ろから聞こえて来た声は、何故か少しでも楽観的で、『あ、裏切られた』と、即理解できた。確かに俺も最初お前を置いて逃げようとはしたけれど……何もジンまで……。

「じゃーな、秀介。今度マツクなあ。絃一君もサヨウナラ」

俺にも誰にも有無を言わず、手をフリフリ。そのまま背を向けて行ってしまった。……アイツ、本当に抱くのじゃなく俺自体に飽きたんじゃないんだろうか。

「俺等も帰るぞ」

「っだから……イヤだつてっ」

「逃げんなっつの！」

腕を掴まれたと思ったら、今度は胸倉を掴まれ。他の人から見れ

ば完全なる殴り合い喧嘩の一步前だろう。他校の制服と、目の前の学校の制服を身に纏う俺。シチュエーションもバッチリだ。もしかしたら誰かがそうなんじゃないかと勘違いして先生呼びに行ってるして。

「今日話さないで毎日ここに来られて家にも押しかけられるのと、今日話して全部解決すんの。どっちがいい？」

2つの提案。それはつまりに、今日で縁を切るか否か。って、そんな選択なんだろうか。それならば俺はすぐにでも後者を選ぶ。どこかがズキンとしたのは気のせいだ。

「……はなす」

小さくそう呟いた俺の胸倉を放し、睨みを止めた絃一が溜め息を零す。

何を思ったかはよく分からない。

「行くぞ」

久しぶりだった。

絃一と学校から家に帰宅すんのかも含め、バスに乗ったり、電車に乗ったり。何一つ会話なんか無かったけど。目も一回だって合わさなかったけど。少し楽しいと思ったのも、絶対気のせい。

自分の家のある街に付いた時ガツカリしたのも、きっと気のせい。先に行く絃一の背を、ただただ追って歩いていた。前を向く絃一の目を見計らって逃げるつても出来たと思うが、さっきのあれが続くのは、俺にも絃一にも分が悪いだろう。

「え、なあ。俺ん家……」

「俺ん家行くに決まってるだろ」

いつ決めたんだと、俺は眉をしかめて見た。俺の家のある方向を曲がらず、真っ直ぐ進む絃一。先にあるのはその通り絃一の家で。

俺は何か少しだけ不安を覚えた。

だから今度こそ

「入って」

久しぶりに入った絃一の家は、あまり特に何か変わったところは見当たらなかった。見たまんま昔のままで、昔はあそこで絃一と笑ったり、怒られたり……。知らない思い出が頭からどんどん溢れ出して、気分が悪くなってきた。

先に行けと、案内されずともふらりと向かった先の絃一の部屋も前と何等変わったようなところもなく、強いて言えば、少し汚いつてとくらいだろうか。どちらにせよ、長居なんか出来ない。いらん事まで言ってしまうそうな。……いや、いつそいらん事を口にして、気味悪がられる方が先決なんだろう。男に好きと言われればそれはそれは気持ち悪い事だろう。

だから今度こそ――。

「飲みモン持ってきた」

今の俺は、絃一にとって立派な客人らしい。いつもならセルフサービスだった。手っ取り早く言ってしまうえば、それは絃一にとっての家族扱いだった。聞いた事は無いが、よく分かる。だから苦しいの悲しいのなんの……。

「んで、さっそく本題入んだけど。……なんで避けてんの、俺の事」
本当に単刀直入すぎる。奴は俺に落ち着かせる時間も与えてはくれないらしい。

「き……嫌いだから……」

声が震えた。震えすぎて気持ち悪い。斜め右下を睨みながら、俺は顔を上げられず、俺はコップの中に入った麦茶をゴクゴクと飲んだ。久しぶりのその味も、全然変わっていない。

「本当に？」

追い討ちをかけるかのような絃一の声に、何故か緊張が止まない。胸がドクドクと、吐きでそうな程に脈打っている。

「ん、ほ、本当に」

「こつち見て言えつつの。説得力のカケラも無え」

溜め息と飽きたような声が目の前から聞こえてくる。

まあ、そりゃそうだ。目を見て話すって事がどれだけ重要で信用のある事が、俺は生まれてから今まで10年後半生きてきて、結構良くわかったつもりだ。それでも、いつもいつでも何も考えずに目を見て喋れる術は身に付けてない。こういう場合は特に。こういう心情の時は特に。

正にしなきゃいけないって時に出来ない。なんとも不都合なことだ。

「……お、おば……おばさんとおじさんは？」

とりあえず、話を逸らした。心の整理とでも言うのか、なんて言うのかはわからないが、ちゃんと気持ちを落ち着かせてから本題に入ろう。

「ああ、母さんも父さんも明日まで帰ってこねえ」

「はあ?!」

「出掛けてんの。どこ行くかは忘れたけど、昨日言ってた」

いつもいるおばさんがいなかったから何処に行ったのかと思えば

……今は家にいない……?

「何、その顔。何かいなきゃいけない事でもあんの？」

当たり前だろう!!

心の中で思い切り叫んで見た。

自分がどんな顔していたかは知らないけれど、とりあえず絃一と自分の二人きりってのだけは絶対に嫌だった。こんな状況嫌に決まってる。

気持ち落ち着かせてる場合じゃない、ていうか落ち着かせてなんていられない。早くここから出よう。帰ろう。

早く。早く。……でもどうやって、まず何から話せばいいのか分からない。コイツの目を見て嘘なんか吐けない。じゃあどうすれば……。

『何でそんな事したのか、これからどうして欲しいのか。それに、謝罪』

母さんの声が、ふと頭によぎった。

そうだ、嘘を吐かなくとも、素直に言えば、謝れば。
紘一は、分かってくれるだろうか。

危険、かもしれない

コップの中のお茶を飲む。中身が無くなれば、紘一がお茶を注ぎ足す。そのお茶を飲む。飲み干して、注ぎ足される。

その繰り返し。

「何か喋れよ、黙ってちゃ分かんねえ」

その間ずっと無言状態で、痺れを切らした紘一がようやく俺に話しかけるまで、ずっとそのままだった。どうせ話さなきゃいけないじゃないとここからも出られないし、相手が紘一じゃあ警察が来るまで出させてもらえなさそうだ。

「……」

理由を全部話したら、きっと殴られる。殴り殺され……るまでは無いとしても、殴られるのは多分確定だろう。それくらい深く酷い事をしてしまったって事は充分に分かっている。

殴られる覚悟をしておこう。

「おい、だから……」

「俺の事、嫌いになって欲しい」

少しくらいの覚悟を覚えたので、俺は口を開いた。まず何を言っているのか思い付かなかったので、結論から言う事にした。

「な……に？」

意味不明の俺の発言に目を見開き、頭にクエスチョンマークを浮かべる紘一の反応に、俺は『そりゃそうだ』と、心の中で納得した。俺だって言われたらそうなる。

「嫌って欲しいから、意味分かんねえ行動たくさんしたんだ。携帯のメアドも番号も変えて、避けたり、家にあげなかったり、顔合わせなかったり、夜這いしたり。全部お前に嫌って欲しくてやった」

「……」

紘一は、黙って俺を見た。目をじっと見つめられて、一瞬逸らしそうにもなったけど、頑張って耐えた。本当だと、嘘は吐いていな

いと証明するように。

理由を聞いた紘一は、今何を思ってたんだろうか。やっぱり意味不明だと思ってたたり、案外ああ、そう。的な風に軽い感じだったり。でも何を思ってたいても、最終的に一つの疑問にたどり着く。

「なんで嫌いになつて欲しいの？」

ピンポイントについてきた質問に、少しだけ息が切れる。

そんなの好きだからに決まってる。他じゃ決まってるかもしれないけれど、俺の中じゃ決まってる。男が男を好きになる。キリスト教じゃ罪になるって、目の前のコイツから聞いた事だ。分かりきつてることだけど、キリスト教を除いても俺みたいなのを嫌いになる人は世界中に五万といて、だからきつと、俺が紘一を好きになる事事態間違ってたんだろう。

これが俺の結論だ。こんな俺のせいで、紘一をも巻き込んでしまうかもしれない。一緒になんて、そんな絶望的な事は出来ない。

だから。

「好きなんだ」

これは、告白とはちょっと以上に違う言葉。別に『付き合ってください』なんて意味は含まれていない。その逆。

「お前の事好きだから、嫌われようとした。ごめん」

「……」

「だから、もう他人になつてくれ」

——終わった。

全部終わった。やっぱり、言いたい事全部吐き出したら、少しだけ体も軽くなったかもしれない。それが一時的なモノなのかも知れないけれど。これだけでもう、俺は全てを諦められると思う。普通に帰れると思う。

後はもう、紘一に殴られてプログラム終了。

全ての怒りを全部、俺にぶつけてくれればいい。

「なんだそれ……」

ワナワナと震えだす紘一を見て、俺は歯をくいしばった。伸びて

来た絃一の手は、俺の胸倉を掴んでいて、覚悟していた筈の気持ちの中に、少しだけ恐怖が訪れてきて、目をぎゅっと瞑った。

それから感じた感覚は、殴られたときの鈍痛みたいなソレなんかではなく、引っ張られるような、そんな感覚だった。

「え、っうわ。……っ！」

なんだなだと、今の状況を確認するように立ち上がり、姿勢を立て直した。その瞬間に、今度は鈍痛でも引っ張られるような感覚でもなく、押し倒されるようなそんな感覚がした。ふいに押されたので、俺はそのまま後方へと倒れていく。

ガシヨンとバネが揺れる音が聞こえて、耳元で衣が擦れる音が聞こえた。倒れた先には、やっぱり何も痛い感覚はなく。変わりにふかかな柔らかいベッドがそこにあった。

「人が遠慮してたらそんなこと考えてたのかお前……」

「ちよ、…なにっ?！」

「もーやめた。ぜってえやめた。ああ、てかそうだよな。そういうヤツだったもんなシユウは。よく分かってんだよ」

「だから何がっ!」

意味の分からん事をブツブツと呟く絃一が、俺にまたがってきた。まさかここで殴られるのか。なんて思ったけれど、あれ?　っと俺は不思議に思ってみる。

「シユウは口で言っても分かんねえもんな。……体に直接叩きこまねえと」

この状況で、気持ちの悪いその発言。

あれ、え?　なんだコレ。どうなっちゃってんの。いや、じゃあ待て、……俺は今、ここにいちや危ないんじゃないんだろうか。

「まて、おい。お、おばさんが帰ってくるかもしれねえじゃん?

だから……」

「今日は家に俺しかいねえ」

「だから、予定変更で帰ってくるかもしれねえじゃん?　話し、話しあおう!　な、なっ?！」

「体に叩きこんでやるから、それからゆっくり話し合おうぜ」

話を聞けよっ！

そんな訴えも届かず、悪い笑みを浮かべ、少しだけこちら側に身を乗り出してきた絃一に、俺は身を震わせた。

「え、ちょ、ま、待て。シャレンなんないってマジで」

絃一の目が、間近で俺の目を捕らえた。こんなに近くで見ると、初めてで、息が苦しくなった。絃一の目に俺が写ってる。

悲しい、なんて思ったのも一瞬。絃一の手が俺の服の中に入ってきた。

これは本当に、危険、かもしれない。

本当に最低な奴 R15（前書き）

性的な描写があります。

15歳未満は見ないことと、苦手な人は閲覧しない事をおススメします。

そんで性的描写ってどうも苦手だ・・・

本当に最低な奴 R15

目の前の頭が、俺の体の上で動き回るのを目を見開いて見ていた。
「はっ……ちよっ、ほんと……やめろって！」

押しのけようとして、余り動じずいつまでも俺にまたがり続ける
絃一の体。無理矢理足で足をこじ開けられ、一向に俺の意見は聞き
入れない。

「だからやめないうて。何回言わせんの」

この間の夜と同じ筈の行為が、何故か前とは全然違う。立ち位置
が逆で、大体、絃一は素の状態だ。眠ってもいないし、ましてや手
も目も拘束はされてない。

「やめるまで言い続けるぞ俺は……っあ……」

拘束されてんのはむしろ俺の方だった。

「え、あ、ちよっ。やめっ、なにやってんだっ！」

絃一が自分の制服のネクタイを解き、それを俺の両手に結びつけ
ていた。2回3回きつく縛って、念入りにベッドの柱にもネクタイ
を縛り、さらに身動き出来ないように固定をされた。そんなにきつ
く縛って後でちゃんと外せんのか？ とか、そんな質問が頭をよぎ
るが、今はそんなことどうでもいい。

「シユウだって俺にしたじゃん。」

「ネクタイは目隠しだったから！ だからそれは違うだろっ！」

「身動き取れなくてんのは変わり無くねえ？」

「っ……」

反論できねえ……っ。ていうかこういう状況を過去に俺からやつ
てしまったから、この行為さえ上手く否定できない。

「うわ、っあ……」

制服のシャツが外され、何か生温い感触が上半身を這う。この感
触はすっごいよく知っているけれど、されてるのがジンじゃない。
これはジンじゃない。だから何か意味が分からない。コレがもし絃

「一じゃない別の奴なら、俺はどんな反応をするんだろうか。きつと、気持ち悪いとか、思ったりして。」

「つついち、やめっ」

久しぶりの突然の感覚に、少しだけ腰が浮いた。すかさず腰とベツドとの間に手を差し込み、俺のズボンを下げる紘一。コレは本当に、本格的に、ヤバくなってきた。下半身が直に空気を纏うようになって、さらにヤバさが増した。

「紘一やめろっ！ ホントにやめろって！」

「ヤバイヤバイヤバイヤバイ。」

「だから、やめねえって……」

「やめろってんだる馬鹿！ 後悔すんぞっ！ 早くやめろッ！」

「うっせえ！ 黙ってやられろっつの！」

「いやだってエっ！」

夕方から何を大声で言っただと、……。親がいないからって、さすがに周囲からはドン引きされるような言葉の飛び交いだった。

「んな、あ、ちよっ。……やめっ」

決定的な刺激が届くのに、そう時間は掛からなかった。感じるな感じるなと思っていれば思うほど刺激が感じられるし、その刺激の度に体が震える。

「あ、気持ち良い？」

それを読み取った紘一が行為をさらに続けようとして、まさに悪循環だ。

手はネクタイで縛られているし、そのネクタイはベッドの柱で固定されてるし、ズボンはパンツと一緒にズリ下げられるし、相手は紘一だし。

「や、あ……あアっ……う」

最悪だ。めちゃくちゃ気持ち良い。俺の望んだ物とはかけ離れている現実が、こんなにも気持ち良い。……最低だ。

「はあ、あ、アっ、こ、ついち」

しばらく、続いていく快楽を生む手が、ふいに変な方向へ向かつ

たのが分かった。

「ちょ、どこ触って……やめろっ！そこはマジで、ちょ、っ……んっ」

普通ならこんな事には絶対に使わない場所。ましてや本来の役目を入れるんじゃないやなくて出すところだ。根本的に間違っている。

「なあ、ここさ。昨日も一昨日も、ジンにやられちゃったわけ？」

ふいに、低い声が、耳に響いた。

「え？」

思わず聞き返すと、紘一が舌打ちしたのがわかる。どこに舌打ちする理由があるのかはナゾだけれど、何かイラついているのは充分に読みとれた。

「何で好きじゃない奴と出来た？」

「そりゃあ……俺、お前に同じ質問できるじゃん」

——紘一を諦められるまで。

そんな風にして決めた行為だった。男同士の性行為。だからこんな風にされたら、中々抜け出せなくて困る。紘一がどういう理由で女を抱きまくってたのかは知らないけれど、そうとう前からそれをしている。

「この前俺とヤッてさ、……どうだった？」

どうだったってのは、事の感想か、体の痛みの感想か。

「……嬉しかったよ。紘一も、気持ち良かったでしょ？」

これで諦められると思っていたのに、やっと離れてあげられると思っていたのに、逆に近づきすぎている。今は紘一が気持ち良いんじゃないくて、俺が気持ち良くて、……そんな快樂、必要は無いだろう。

「嬉しくて嬉しくてさ、まだ体にその気持ちが残ってて……消して欲しいのに、ジンはそれを消してくれねえし。ホント、最悪だわ。今のコレも含めて」

ジンは何か知らないけどやろうとしないし、飽きた？と聞いたら飽きてないと答えた。一種の嫌がらせだろうか。

「は？ 何それ、土日はジンのとこにいたんじゃねえの？」

「いたけど、1回もそれらしき事はしてねえよ。もしかしてそれでこんな事してんなら、早くやめ……っておい！ 再開すんなあ！」

最初に言った通り、本人はやめる気は一切ないらしく、俺に快楽を与えようと体を這っている。

「んんっ、く……うあ、はっ、あ」

苦しい感覚に、自然と腰が浮いた。焦らすように中を探る紘一が、ふいに口角をあげクスツと笑う。その表情に少なくとも見惚れてしまった俺は、ドキツとして体を身震いさせた。

——なんだコイツ！

なんでそんな顔してんだっ。俺にこんな事しちゃってる途中だぞ。しかも俺もなんだドキツて。恋する女子でもなんでもねえし、気持ち悪いだろ。

「アあうっ……っん、うあ、あ」

嬌声が口から漏れまくる。手は拘束されているし、口を噛んでみれば紘一に無理やりこじ開けられるし、本当に最悪で。でも快楽は全く収まる気配がなく、こういう行為だから当たり前と言えばそう言えるかもしれないけれど、多分、それだけじゃない筈だ。紘一にやられる。紘一とやる。不本意だけど、気持ち的にも体感的にも気持ち良かった。

だから、俺は本当に最低な奴。

「っちょ、シュウ。俺もうマジ無理だわ」

「へ、……？ ア、っあああっ！」

下から突き上げてくるような、そんなありえない程の感覚がいきなり襲ってきた。指とはまた違う大きさの異物感に、ヒュツと息が止まる。

それで、止まった時にこう思った。

本当にもう、俺は、死んでしまいたいかもしれない。

お前から消えてやりたい

死にたいかと思った、その後で。

目を開ければ、カーテンの間から日差しが照らしだしていた。窓を開けているみたいで、風が吹く度に、カーテンが揺らぐ。その度太陽の日差しが眩しすぎて、俺は目を閉じた。いつ解放されたのか、腕を見てみると少し以上に赤くなっている。手も腰も痛くて、少しだけ胸が苦しい。

ちゃんと話して終わりにしようと思ったのに、何故かいきなり組み敷かれ、無理やりやられ、やられまくった。1回終われば2、3分くらい休憩して、そんでいきなり『うしっ』と一言言っただ。まただ。

正直ドン引きした。

隣にいない温もりがどこに行っただのかは知らないが、気分はいつも増してブルーだ。

「朝じゃん……」

「もう昼だぞ」

いない温もりが、部屋の扉を開けて俺に話しかけてきた。手に持ったミネラルウォーターのペットボトルを俺の額に乗せた。俺はそのペットボトルを受け取り、しばらくそのまま額に乗せたままにした。

「昼かよ……学校……」

久しぶりに登校したと思ったら今度はまたズル休みとか、これじゃ精勤も狙えねえじゃんか。

「学校より俺等ん事だろ」

その俺等の事つてのも、昨日早々に終わらせとけば、今日だって普通に登校出来ただろう……。なのに何でこんな――。

「俺の要件は全部言っただろ……。なのに何やってんだよ」「セックス」

「だから……」

きつぱりと言い放った紘一に、呆れてため息をこぼした。そういう意味で聞いているつてのもあるけれど、そういう意味の事を聞いているんじゃない。俺がわざわざ諦める努力をしているのに、これじゃあ無意味って事だ。

それにこれは別に――。

「セックスじゃねえだろ、これは」

否定。

「……は？」

前にも同じ事を言われて、同じ事を思った。

これは本当に、お前がいつも女の子とやってる事と同じ事なのだろうか。俺はそうとは思えないし、同じ事にするには何か失礼な事だとも思えてくる。

「紘一がいくら俺の中に精液出しても、俺が妊娠する確率はゼロだ。性病にかかるだけの何のメリットもない行為で、だから」

そうだから、最初から間違ってる。

間違いを修正しようとしているつてのにこの目の前の男はそれに一切協力さえもしてこようとはしない。子供の時から協力的な奴ではなかったが。

「俺がお前の事好きでも、結局何のメリットもないし。……」

「むしろ傷つく」

「お前が傷ついて」

「そうした俺を憎む」

「恨む」

体を繋げてわかる事なんて、そんな簡単な事、最初から俺とお前の間にはなかった。それは事実。

「……」

「だから……俺が言いたいの、お前への気持ちを絶ちたいから、もう幼馴染も、友達つてのも、関係全部やめて欲しいって、そういう事」

それから紘一は、俺をずっと見たりしていた。何か下を向いて考えたり、こつちをふいに見てみたり。何を考えているかはわからないけれど、俺はそんな紘一を見ていた。

「俺は、っ」

紘一が黙って黙って、そして何か言おうとした時だった。

「ただいまーっ」

玄関から、そんな声が聞こえた。

「紘一っ、あんた何で学校行ってないのさっ！」

玄関の靴で判断したのか、階段をドタドタと上がりながら紘一に怒鳴るその声に、紘一は溜息を吐きながら指で目をこすっていた。

「なんとか言えこのバカ息子っ！」

ボタンっ、っと扉が開き、睨みあげるような顔が紘一を捕らえようと部屋の中へ視線を泳がせた。真っ先に紘一を見つけ、何か言おうと大口を開けたところで、その人が俺がいるという異変に気付く。『って、秀介君？』

「あ、いや。……お邪魔してます……」

紘一によく似た目元をしている。いや、正確には紘一が似ているのか。紘一のお母さん事おばさんは、久しぶりの俺に、何故か目を大きく開けた。

「久しぶりだねーっ！ 中学以来？ 懐かしいなー」

紘一そっちのけで、俺に近寄り、手を取る。その手の綺麗さも、紘一も同じ感じがする。

「ね、今夜大丈夫かな？ 夕飯食べていかない？」

「え、いや、っあの。……俺は……」

「ああ、母さん。秀介食べてくから」

「ちよっ……」

「そお？ じゃ準備するからっ。今日はすっごい御馳走だよー」

さすが親子とでも言うんだろっか。そこから俺の決定権は無かった。淡々と決まるこれからの俺の行動。今日、俺はこの家から出る事は出来るんだろっか……。

紘一を怒らず、ウキウキと部屋から出て行ったおばさんが、下で
おじさんと話しているのか、軽く笑い声が聞こえた。

「お前……」

頭を抱えても、後の祭り。

親さえ巻き込んでしまった、紘一を睨んだ。

「ゆっくりしてけよ、シュウ」

「ふざけんな……」

俺は早く、お前から消えてやりたいのに。

そんな風に思ったのでした（前書き）

最終話ですが・・・

なんか微妙になった・・・

そんな風に思ったのでした

「なあなあ。知ってる？ キリスト教じゃあさ、同性愛は罪なんだって」

「……へー」

紘一の家の、紘一の部屋。紘一の親は、俺が久しぶりに家に来たのを喜んで、俺の分の夕飯だって作ってくれている。俺の心中は1分1秒だって紘一の前に居たくなくて、早くこの家を飛び出したいのに。それが出来ない状況に苦しんでいる。

話したくない人物が目の前にいて、聞きたくない話を聞かされて。

それはすつげ前に聞いたよ。とか、俺はそんな同性愛をしちまった罪人だよ。とか、そんな事を考えながら俺は愛想なく返答した。

「そーんな縛りがあるのに、すげえよな」

「？ 何が」

すげえよな。なんて意味の分からない発言をされて、クエスチョンマークを頭の上に立てた。何も凄くなんかない。宗教なんてほとんどの物に縛り規則がついている。それが普通だ。

「だってさ、考えてみるよ。こう言っちゃアレだけど。実際に見た事無い人物を文と話で信用して崇拜して、自分の思考まで規制できるんだぜ」

「規制するも何も、だって、……それが普通なんだろうが」

「普通？」

「普通は同性なんか好きにやならない。そんな普通の奴等の中で同性愛者つー異常者が出て来たら。そりゃ気持ち悪がって規制くらいするだろ」

俺と同じ類を批判しない人は、この世界に何億人居ると思う？
絶対に過半数以下だぞ。

同じ性別の人間を好きになるんだ。そりゃあ……気持ち悪いだろ

うさ。

「シユウの言う、その『普通』って何だ？」

俺の言う普通なんて。

「普通は、普通だろ。一般的に考えられてる、あー……そう、常識だ」

人や物事の挨拶とか、礼儀作法とか。その他色々の常識と同じ。

近親相姦はいけない事。同性愛もいけない事。日本じゃそういうので結婚は駄目ってちゃんと文にもなってるから、コレは『常識』、『普通』な事。

「普通ってなあ、そりゃ、不確かだろ」

不確かな事。絃一はそう言った。

「世の中には礼儀作法はしないって常識の奴だっているかもしれない。挨拶だって、隅々まで探しゃ、しないヤツはいるだろうよ」

「お前、そんな奴いたって、確立はっ……」

「確立は少ないけど、いるかもしれないでしょ」

完全には、否定できない話し。

「世の中が作りだした普通を信じたいのはわかるけど、それで自分の思考まで規制しちや駄目だろ」

「世の中が作り出した普通に背く勇氣なんか無えよ。この地球上、何十億人居ると思ってるんだ」

だって、そこまで俺は強くない。

「宇宙から例えて見る。地球に住みついている何十億人が、未だわからない程広いんだぞ。まだまだ分からない未知があって、まだまだ見つけれない惑星や技術や種族があって。こんな広大な高さから見たら、地球なんて粒子だぞ。それこそミクロの世界だよ。そして俺等人類は微生物じゃん？」

何だか話しが壮大になってきていて、俺はもう絃一が結局何が言いたいのかも分からない。地球は宇宙からすれば粒子で、人間は微生物。

「そんな風に例えるんなら、俺は病原菌みたいな、きつとウイルス

だろうな」

そう言つと、紘一がいきなり俺を睨み上げた。余計な事考えるな、みたいな。そんな感じだろうか。

「ていうかお前、何か勘違いしてるだろ」

「は？」

「同性は結婚出来ないって言ってるだけで、別に恋愛すんななんて言われてねえじゃん」

恋愛するな何て、確かに言われてねえけど。それでも、原に気持ち悪がる奴が出てきてるじゃん。過半数超えてるじゃん。

「シユウは人に流される性格だったわけ？」

意味の分からない話から、何故か俺の性格を悪く言つた紘一に、俺は震わせながら声を張り上げた。

「……つまえ！ 結局何言いてえんだよっ？！」

それに、何だかこれ以上話していたら俺の発言が支離滅裂になつて行つてしまいそう。人間を微生物にまで例えて、一体何が言いたいのか。

紘一が静かに口を開いた。

「顕微鏡で拡大しなきゃ見えない微生物の、何十億分の一なんだよ。俺達は。だから……そんなちつさな奴等が作り上げたちつぽけな『普通』なんて、そんな物で自分の気持ちを規制なくてもいーんじゃねえの？ シユウ一人静かに素直になつたって、俺しか気づかねえよ」

お前が俺の素直な気持ちに気付いたって、お前がその気持ちに同意してくれなきゃ、素直になつた意味なんか無え。

無駄な事だつたってなるじゃないか。

「俺が素直になつたって、素直になつた相手にどうも思われなきゃ、お終いだよ……」

俯きながら呟いた。訴えと言うか、批判と言うか。

そうしていると、紘一が溜め息を吐いて、俺の名前を呼んだ。眉の先端を引き上げて口角を少しだけ上げている。

「俺がコレだけ言ってるのに、まあだ信じてくれないワケ？」

仕方無いなあと、一言。

「……何がだよ？」

言ってる意味が本当に分からなくて、俺は今頃になって焦ってる。先ほど紘一の母さんが持ってきてくれたグラスコップに入った冷たい紅茶を、一口だけ口に含む。

「俺はシユウの気持ちを批判なんかしねえし。だから何されたって何言われたって、俺はシユウの事嫌いになんかなんねーの」

「……」

驚きで、口に含んだ紅茶がゴクつと言う音を立てながら喉を通った。喉の乾きが潤って。目の前の人物に目を見開く。

「な、俺の事どう思う？」

素直になれ。普通一般の常識。規制されたら。自分の気持ちは。批判なんか。俺の事どう思う。俺はシユウの事嫌いになんかなんねーの。

言葉が巡る巡る。巡って、最後に紘一の言葉。俺がお前の事好きって言っても、俺の事嫌いにならない？　じゃあ、お前の中の俺の存在って何だ？

ただの幼馴染？　友達？　知り合い？　そんなちつぽけな存在なんて。

「そんな軽い存在なら、とことん嫌われて……忘れられなくなった方がマシだ……」

優しくなんかするな、俺に笑うな、声をかけるな、そんな目で見ろな。

「期待しちゃうから……そんな事、……言うな……」

目尻に溜まった涙が零れそうになって、俺は体育座りをして頭を伏せた。零れそうになった涙は本当に零れて、ズボンが濡れた時。

「好きだよ」

自分の顔の近くから、そんな声が聞こえた。

期待しちゃうからやめろって言ってるのに、やっぱり紘一は俺の

言う事なんかきかない。

「っだから……！」

「期待しちゃっていいよ」

俺の両腕を掴み、その瞬間、紘一の胸の中に引き寄せられた。突然のことで、ていうかこんな事されると思ってなくて、俺は涙の溜まりまくった目を見開く。

「期待してーんだよ。俺は、シュウの事嫌いになんかならねえから。死んでも忘れねえし」

「……っ」

「だって俺、シュウの事好きだよ」

本気が嘘で言ってるかなんて、すぐに分かった。皮膚より、筋肉より骨より奥にある心臓が、標準値以上に高鳴ってるから分かったんじゃない。それは理由の一つにすぎなくて。

「信じねえよっ、俺は」

でも俺は、そんな事認めたくはなかった。

「何でだよ？」

「だってお前。いつも、女と一緒に居て、……話しもほぼ女の話しで、…俺は男だから。っだから」

お前の『好き』なんて言葉を、信じられるわけなかった。たとえ本気で言ってるって事が直感で分かっちゃったとしても、それを信用なんかしたくない。

——好きなんで、お前にとっちゃ挨拶みたいなもんだろ。

「『俺、まだ誰にも好きって言った事無いんだよね』」

「知ってるっつの！ 何回聞かされれば言いんだよ！ だから何だよっ?! 俺には関係なっ……関係、かんけ……」

まだ、誰にも好きって言った事無い。

何度も何度も、いつまでも聞かされ続けた話し。

「だから、シュウに今言っただのが初めて」

だって俺、シュウの事好きだよ。

「なっ……うそ、いやっ……」

「嘘じゃねえって事、シユウが一番分かってんじゃないか」

ギユウつと今よりもっと抱きしめる腕の力が強まった。

分かってる。俺が一番分かってる。そうだ。だって俺、紘一をいつも見ていた。気付いたら紘一はもう隣に居て、だから、初めて恋愛感情を持った時……。

「悲しかったんだ——」

コウは俺をちゃんとした目で見ていてくれるのに、俺はこんなに汚い感情でコウを見てて。同性だから悲しいんじゃない。コウがいつも女と居るからじゃない。

「コウが俺なんかにかかれた事が、悲しかった。」

コウの目ん玉の中に映る俺に、憎悪さえ覚えた事もある。嬉しそうな顔しやがって、とか。汚い目で見てんじゃない、とか。これ以上コウに近寄るな、とか。

「馬鹿だ、……馬鹿シユウ」

そう、俺は馬鹿だから。だからあんな事でしかコウを諦める方法を思いつけなくて。

「俺のがシユウの事好きだし。俺の方がシユウの事先に好きになったし……」

「コウ……」

本気だつて。分かってしまう俺が恨めしい。

幼馴染以上の関係を求めてしまう。願いが増大しちまって。

「ごめん、コウ……。ごめん、ごめんなさつ。俺っ、俺もう、こんなに汚いけど、本当に、お前の事……っ」

言葉の続きを、言ってしまったてもいいんだろうか。

言ったらいつか、コウに不幸が訪れてしまいそうで。それは嫌だから。

俺が続きを言ってしまったら、コウの未来は？

「大丈夫」

紘一が俺の質問に答えるかのようにそう言った。大丈夫なんて、そんな信憑性のない言葉だった。

「……」

そんな、信憑性のない言葉の筈だった。

嘘を言っていない顔をして、紘一がそう言っている。そんな信憑性の無い言葉を信用しないか、紘一を信用してしまうか。

きつといつもの俺なら絶対に信用しない筈なんだ。

だから多分、俺は、馬鹿になってしまった。

「つ……。 - - 好きだ」

「うん」

「こ、後悔しても。しんねーからなっ……」

「そんな勿体無え事しねー」

俺に好きと言われて後悔する事が勿体無い。素直に、嬉しかった。嬉しくて嬉しくて、それでもまだ、不安な思いは消えてはくれない。紘一が後悔しないと言うなら、大丈夫と言うなら、信用はする。それでも、信憑性の無い言葉。

後悔したって、そんな日が来てしまつかもしれない。

「好きだ」

「うん、」

でももう、好きって言ってしまった。だから後にはもう戻れない。

「好き」

だから前向きに考えてみる。

この先後悔されてもいいように、今から沢山、一生分の好きを言ってやる。飽きられるまで、後悔されるまで。

「俺も、シュウの事好き」

好きと言ったら好きと返される。ただそれだけが、嬉しくて、悲しくて。

でも俺はただ、幸せだなー、なんて。

そんな風に思っただけでした。

そんな風に思ったのでした（後書き）

後書きと言つ名の言い訳。

テーマは

「嫌われない好き」

「素直になれない好き」

みたいな感じなんですが・・（いや、今考えたわけじゃry:）
最後は慣れない感じでお互いが好き好きになつてくれればいいかな
ーと。

それでもまだ最初の好きなんですね・・・

シユウは奥手の中の奥手君なんで、最初は嫌われたくて、でも最後
に紘一から好きと言つても大丈夫と言われて、「嫌われない好き」
から「嫌われるかもしれない好き」に路線変更。それでもまだ完全
体じゃねえな・・・

そんで多分ここから素直になりまくつちまった紘一がシユウの「嫌
われるかもしれない好き」を「大好き」に修正しまくる・・・はず
！（妄想）

ジンについて・・・

ジンは最初シユウを好きにさせる筈だったんですが、なんか辞めた
（笑）

シユウとは体の関係はあるけど、心までは繋がりにくい・・・
まあ、言うなれば「心の隙間を埋めきれない人間」ですかね。心の
どこかで埋めたくないとか自覚していたり・・・

それはきつとシユウだけじゃなくて他人間すべてに同じで、ようす
るに俺に何とかされる前に自分でなんとかしてしまえ、と、少な
らず背中を押してあげる、

そんな優しい人間にしたかった・・・

シュウが土日泊まりに来て、一回も抱かなかつたりしたのもそのせいですかね・・・本編で書く描写スペースがなかった・・・あとマジで尻が痛いのを読み取っていたか・・・

そんなわけで、

ここまでご愛読ありがとうございました。

感想、評価、アドバイス、レビュー等々・・・
よろしくおねがいします(´・ω・｀)ゞ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8813r/>

マイクロブ

2011年6月27日05時55分発行